

慶應義塾大学経済学部研究プロジェクト

最終成果論文（2018年度）

『夜はやさし』と「パパ活」に見る
父^{パパ}と娘の関係性

経済学部 3年 学籍番号：21740104

氏名：亀谷早紀

（指導教員：新島進先生）

目次

1. はじめに 『夜はやさし』と「パパ活」	2
2. ピグマリオンとして登場する男性たち	13
3. 発達段階におけるタブーとしてのインセスト	27
4. 信頼関係の崩壊と孤独	49
5. 結論	60
参考資料一覧	63
あとがき	67

1. はじめに 『夜はやさし』と「パパ活」

「父と娘」の関係とは、一体何であろうか。このことについて考え出したのは、大人になる、成長するとは何だろうと思ったことからだった。折しも、フィッツジェラルドの作品を読んで、大人、成長という言葉は、なぜか私に父親というフレーズを連想させた。フィッツジェラルドの短編「自立する娘」（1931年）では、20代の頃に父親を亡くす女性が、自らの人生の分岐点に立ち、今までとこれからを再考察する姿が描かれている。娘であること、20代ということ、そして自分の将来について彼女が悩んでいることは私と重なった。そして、彼女の父が亡くなるということは、これからいつかは私に訪れるであろう父親の死を思わせるものでもあった。20代というのは精神的に、少年・少女から大人の男性・女性へと、人生の転換点に立っている時である。そして、親から経済的にも精神的にも、完全に独立する時期でもある。この時期、それまで自分を守ってくれた大きな存在からの精神的自立は大きなテーマだ。しかし、それと同時にこの時期は、自分を大切にしてくれる人、愛情を注いでくれる人、自分も相手にそのような感情を抱くことができる相手が生涯を通じて必要だと、私自身が感じている時期にもなる。

そんな相互に気遣える関係性は、同性同士はもちろんだが、この論文では異性同士のそれに着眼してみる。なぜなら、同性同士の関係というのは、同格な者同士というヨコの関係が多い。上下関係などがない気の置けない友達や、友達のような母親などだ。一方で、異性同士では特に年が離れている場合は上下関係とその役割がより明確になる傾向にある。そのタテの関係から様々な問題

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
やテーマが浮上する¹。

親が性別の違う子供に向ける愛情には何か特別なものがあるのだろうか。女性は、自分を守ってくれる年上の男性に魅力を感じる傾向があり、男性は、これから自分の手で育てていけるような年下の女性に心を奪われることが多い²。そう考えると、母親と息子より、父親と娘は恋人的な関係だと言える。父親にとって娘は自分の分身であり恋人である。その愛情を受けて育った娘は、成長して女性になっても父性的な愛情を恋人や結婚相手に求める傾向があるのではないか。「大人になれない娘は自分を無制限に受け入れてくれる父親のような男性像を理想に持っている³」という。事実、若い女性が、一回り・二回り以上の男性と親しい仲になったり、結婚することは、特に珍しいことではない。その逆（若い男性が自分の歳の一回り・二回り以上の女性とそのような仲になること）は非常に珍しい事例である。

『夜はやさし』（1934年）と出会ったのは3～4年前のことだ。そしてそれ以来、つねに私のベストワンの小説であり続けている。なぜこんなにもこの作品に心を惹かれたかは正直分からないが、この小説には人生について考えさせる何かがある。小説の中に、人生そのものがあると言っていい。私には、それが物語の大きな軸の一つである、父と娘の関係だった。『夜はやさし』に限らずフィッツジェラルドの作品では、「バビロンに帰る」（1931年）や「自立する娘」など、父と娘の関係を描いているものが多い。なぜ彼がこのテーマを題材にしようと思ったのか、あるいは思っていなくても筆が進んだのかは分からない。しかし、彼に愛する娘がいたこと、父親を尊敬していたこと、彼自身が理想の

¹ 「彼氏をローンで買いました」第1話を参考。契約社員の受付嬢が、外資系企業で働く“ハイスペック男子”と結婚し、専業主婦になる夢を実現させようとするドラマ。バブル以降女性も働くようになったが女はヨコ社会の生き物である、男のタテ社会に馴染めず今になって疲れてきた、真の勝ち組は一般職からの専業主婦である、と同じ受付嬢たちと話しているシーン。

² 上野千鶴子『女ざらい——ニッポンのミソジニー』（紀伊国屋書店、2010年）、252-254頁を参考。

³ 田中貴子『日本ファザコン文学史』（紀伊国屋書店、1998年）、34頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

父親を目指していた⁴ことと関係があるはずだ。

守ってもらっていた存在から、いずれ自分が誰かを守るべき存在に人は変わっていく。何かをしてもらっていた側から、相手に対して自分は何ができるかを考える側になる。この、人生の新たなステージ、とも言うべき移り変わりは、子どもと大人の境目である 20 代前後に行われることが多いであろうし、「父と娘」はそれを最も象徴する関係だ。自分を守ってくれていた大きな存在である父と、守られる側であった娘、次に進むためには「父と娘」から脱却しなければならない。しかし、サナギが脱皮するように、するりと、この関係から抜け出すことはできない。脱却しきれない何かがこの関係にはあるのだ。それが一体何であるのか、これから考えていきたい。

異性同士の関係性の中でも、父と娘の関係は、最も結びつきや愛情が大きいものであるのかもしれない。その一方で、様々な問題を孕んだものでもある。そして、父と娘の関係は、特定の時代や地域にのみ見られるものではない。加えて子供がまず初めに関わりを持つのが親である。親子という関係から無関係には成長できない。ゆえに、時代や国を超えた私たちの心の根幹に関わる普遍的なテーマであるはずだ。1900 年代前半のアメリカからだけではない、現代の日本社会から考察しても、不変のものではないだろうか。偶然に去年、「パパ活」という現象と、ドラマ「パパ活」（2017 年）を知った。そこでフィッツジェラルドの作品から始め、この「父と娘」という論を現代日本社会に繋げようと考えた。

ここで重要なことを示唆したい。「父と娘」は、実の父親と娘の関係だけを指しているわけではない。いわば「父と娘」は、父親ぐらいの年齢の男性、娘ぐ

⁴ 藤本純子「フィッツジェラルドの『父と子』の問題」、「帝京大学文学部紀要——英語英文学」（第 30 号、1999 年）、83-84 頁、足立富美『スコット・フィッツゼラルド研究』（北星堂書店、1975 年）、16-17 頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

らしいの年齢の女性、と広範囲な意味を持つ概念として定義できないだろうか。そのような概念上の「父と娘」であることは、父と娘という疑似的な関係でもあるし、男と女の関係でもある。実際の、父と娘の关系到極めて近く、また、超えてはならない線というのがより不明瞭であるか、あるいは存在しない。年齢と性別が重なるだけで、ふと“娘”を見るような心配な目になるし、お酒を飲みすぎた後「危ないじゃないか……」と怒られると、まるで“父”に説教されているような気分にもなる。誰かの父であることや、誰かの娘であることと同時に、男であること、女であることは、その特性を持つのが同一人物の人間なのだから、切り離して考えることはできない。実際の父と娘が抱える問題や男女関係が抱える問題を、概念上の「父と娘」は、はっきりと細部まで新たに映し出す。これこそが、テーマを考える上で重要な点なのだ。

辞書を引くと、パパ＝「①おとうさん。②愛人が自分のパトロンである男性を甘えて呼ぶ語。⁵」とある。パパは、いわば“父”を広範囲で抽象的・象徴的な存在にしたものである。そこで、父親または、“父親ぐらいの年齢である中年の男性”を「パパ」と表記することとする⁶。その男性と、娘あるいは“娘ぐらいの年齢である若い女性”——概念上の関係である二人を「パパと娘」と表す。

ドラマ「パパ活」では、他人同士の二人が“パパ活”を通じて知り合う。そんな彼らが「パパと娘」になり、次第にそれが男女の関係に発展していく、というストーリーである。“パパ活”は、2016～17年頃から流行りだした、近年の新たな社会現象である。よって非常に時事性が強く、現代社会がもつ闇に切り込んだ作品⁷で、社会問題を考察することにもなるだろう。

⁵ 松村明編『大辞林』（三省堂、1988年）、2062頁。

⁶ 実の父親である場合など、父と表記した方が作品の意図により沿っていると判断した場合は、そのまま「父」と表記する。

⁷ ドラマレビューを参考。「パパ活」特設サイト：dTV公式ホームページ(<https://pc.video.dmkt-sp.jp/ft/s0005201?cnt=sh000066>) 閲覧日：2018年12月31日最終確認。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

パパと娘、このテーマについて、本論では『夜はやさし』と「パパ活」の両作品を軸に考察する。その中で、精神分析学的見地から、パパと娘の関係性についてどのようなことが述べられるか、ということにも注目する。キーワードは、7つある。“ミソジニー”、“ピグマリオン”、“塔”、“インセスト”、“父の娘”、“少女”、そして“孤独”である。章ごとに「パパと娘」に関連が深いと思われるテーマを設定し、両作品をじっくりと分析していく。それぞれの章では、共通点や相違点が明らかになる。この二作品だけではなく、フィッツジェラルドの短編や、「パパと娘」を題材とした他作品等も取り上げていく。

最初に、『夜はやさし』とドラマ「パパ活」の作品紹介を行う。第2章では、ピグマリオン（創造主）というテーマを設定する。『夜はやさし』と「パパ活」の男性主人公は、相手の女性よりも年上の男性として登場する。彼らは教育する側であり支配的な男性であるピグマリオンなのだろうか。また、若い女性の方は、彼に従順で教育される側であるのか。これらのことは、パパと娘にも何か関係があるのだろうか。そして、「パパ活」のシンボルとして現れる東京タワーはどのような意味合いを持っているのか。次に第3章では、インセスト（近親相姦）というテーマを扱う。発達段階において、パパと娘にはインセスト・タブーという障害が立ちはだかる。『夜はやさし』では、実際に、パパと娘の間にインセストが起きてしまうのだが、「パパ活」においてもそれに等しい状況が発生する。これらはなぜなのだろうか。そして、娘が少女から大人の女性へと成長していく上で、パパと娘の関係には何か変化が訪れるのであろうか。最後に第4章では、親子関係など近しい存在、つまりは信頼しあえる人間関係の構築に失敗した両作品の主人公たちについて見ていく。そんな孤独を抱えた彼らが、どのように孤独と向き合い、行動していくのか。そこで、パパと娘はどのような機能を持ちうる関係なのか。彼らを取り巻く社会にも注目し、孤独がパパと娘を通してどのような局面へ入っていくのか、ということ考察する。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

本論全体を通して以下に注目する。なぜ文化的・時代的背景が異なる両作品で、パパと娘、がテーマとなりえているのか。両作品には、時代や国が異なることによって何か違う点はあるのか。1900年代前半のアメリカだけに見られること、あるいは現代の日本にのみ見られることは何であるのだろうか。また一貫して共通している点は何か。これらを踏まえて、パパと娘の関係に普遍性があるといえるのかを考えていく。

F・スコット・フィッツジェラルドは、アメリカ合衆国ミネソタ州生まれの「ロスト・ジェネレーション」を代表する作家である。プリンストン大学中退後、第一次世界大戦に従軍を志願する。アラバマ駐屯地でゼルダ・セイヤーと出会い、除隊後の1920年、処女作『楽園のこちら側』刊行後にゼルダと結婚する。1921年、ヨーロッパへ旅行し同年長女スコッティーが生まれる。ゼルダとともに当時の若者のライフスタイルに大きな影響を与え、時代の寵児となる。晩年はアルコールに溺れ、仕事にも息詰まる。精神を病んだゼルダとの葛藤の日々が続き、1940年シナリオライターの仕事をしていたハリウッドにて突然の心臓発作で生涯を閉じる。主な作品に『美しく呪われし者』(*The Beautiful and Damned*, 1922)『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)などがある⁸。

『夜はやさし』(*Tender Is the Night*, 1934)は、南仏のリゾート地から物語がスタートする。1925年、フランス南部のリヴィエラ地方にヴァカンスに訪れていた17歳の売れっ子女優、ローズマリーはスタイリッシュで富裕なダイヴァー夫妻と出会う。夫のディック・ダイヴァーはヨーロッパで開業している精神科医で、医学書も執筆している。妻のニコル・ダイヴァーは、アメリカで有数の実業家の娘で大金持ちである。二人は洗練された社交性を持ちながらも、彼ら

⁸ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』森慎一郎訳（作品社、2014年）、598頁、加えて村上春樹『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』同氏訳（中央公論新社、2007年）、339頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
だけの世界に住んでいるように見え、謎めいた雰囲気を持っていた。ローズマリーは、大人の魅力を持つディックに熱い恋心を抱き始める。ディックは、ニコルを愛している一方で、みずみずしい若さのローズマリーに、心惹かれてしまう。

ディックは、スイスで開業している精神科医である。謎めいた夫妻は、医者として、その患者として出会った二人だった。ニコルは統合失調症⁹を患っており、結婚後も、波のように気分が浮き沈みする症状にディックもろとも苦しんでいる。実は、この統合失調症の原因は、10代の頃にニコルの実の父親との間に起きた、望まない近親姦だった。気分が良くない時は日常生活にも支障をきたすほどで、ディックはある時は夫として、またある時は医者として、献身的に、ニコルに向き合い支えることになる。時間が経つとともに、収まらないニコルの感情の波にだんだんとディックは疲弊していき、アルコールに溺れ、仕事にも支障をきたす日々が続く。二人の生活は少しずつ、だが目に見えて崩壊しはじめ、彼は自らの人生に絶望を感じるほど、二人の幼い子供にかける愛情は強まっていく。

そんな毎日の中、父親の訃報を受け取ったディックは故郷アメリカへ戻り、葬儀に参列する。ヨーロッパへの帰国途中、ローマにて21歳になったローズマリーと再会し、男女の関係を持つ。彼女と再会することで、ニコルこそ彼が真に愛する女性であると気づいたが、疲れ切った彼には、壊れた生活を修復することはできそうもない。そうしてスイスに戻った彼を待ち受けていたのは、娘ニコルに会いたい、と懇願する危篤状態にあるニコルの父親であった。なんとか父親の最後に立ち会おうと駆け出していくニコルだったが、父親は彼女に

⁹ 統合失調症（schizophrenia）とは最近まで精神分裂病と呼ばれていた、躁鬱病と並ぶ二大精神病の一つ。主に青年期に発病し、妄想や幻覚、幻聴など特異な症状を示す。しばしば慢性の経過をたどり、やがて人格に特有な変化を残す。原因はなお不明で治療も難しい（宮本忠雄）。下中直人編『世界大百科事典』（平凡社、15巻）、340-341頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
会うことを恐れたのだろうか。最後の病床から起き上がり、故郷であるアメリカ・シカゴへと戻っていったらしい。

壊れていくディックに戸惑いや不満を隠せないニコルは、かねてからの友人であるニコルの熱烈な信者、フランス人のトミーに心が傾いていく。そして不倫関係になる。最終的に夫妻は離婚し、ニコルはトミーと再婚する。ディックは、最愛の子供たちと別れ、故郷アメリカへ渡り、町医者としてアメリカ各地で開業する。彼からの手紙は届かなくなり、消息不明になったディックとともに物語は幕を下ろす。

彼らの出会いから破局までを、繊細な文章で描いた作品である。「あきらかにディックは内面的には、作者自身の投影¹⁰」であり、ディックはフィッツジェラルド自身がモデルである。「フィッツジェラルドが題材を自己あるいは周囲の体験に依拠しつつ、作品を書いたことは周知の事実である¹¹」。そして「明らかに、『夜はやさし』は自伝的内容の小説¹²」であることから、ディックとニコルの関係は彼とゼルダの生活そのものでもあった。

なお、『夜はやさし』には二つのヴァージョンがある。フィッツジェラルドが『グレート・ギャツビー』（1925年）出版後から、9年間試行錯誤を重ねた『夜はやさし』（1934年、オリジナル版）は、自身の作品の中での最高傑作になると見込んでいたフィッツジェラルドだが、思ったように売上は伸びず評価も厳しいものだった。不評の原因は、苦悩する精神科医が物語の中盤に押しやられてしまったことにあると考え、年代順に物語が流れるよう改訂しようとする。しかしそれは叶わず生涯を終え、彼の残した簡単な指示に従って1951年に文芸批評家マルカム・カウリーが改訂版を出版した。現在、ほとんどの『夜はや

¹⁰ 足立富美、同、143頁。

¹¹ 藤本純子、同、83頁。

¹² ESTEVE Nuria & HUERTAS Rafael, «Zelda and Scott Fitzgerald and Psychoanalysis: The construction of Tender Is the Night (1934)», *Culture & History Digital Journal*, CSIC, vol.7-1, 2018, p.2 より亀谷訳。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
さし』が改訂版（カウリー版）である¹³。

フィッツジェラルドが長い時間をかけて試行錯誤を続け、作品にはその間の生活の苦しさが表れている。世間から酷評されなければ、このヴァージョンが『夜はやさし』であり続けたのだろうか。物語がリヴィエラの海岸から始まりローズマリーが物語の案内者となっているところ、ディックとニコルの出会いを第二巻で展開することで、より鮮明に二人の馴れ初めを印象付けているところは、年代順に話が進むよりも、読者を引き込む形になっている。

社会現象“パパ活”とは、若い女性と30～50代の中年男性がマッチングアプリや交際クラブで知り合い、カラダの関係なし、いわゆる「パパ」と「娘」の関係で、食事やカラオケなどデートをする行為である。それで1回およそ数千～数万円の金銭授受を目的とした活動だ。背後には、大学の奨学金返済や、給料が手取りで20万以下など、経済的に困窮する若い女性——“貧困女子”という問題がある¹⁴。

ドラマ「パパ活」（2017年）は、「高校教師」（1993年、2003年）や「101回目のプロポーズ」（1991年）を手掛けた野島伸司が脚本を担当した。20歳の赤間杏里はテニスサークルに所属しているごく普通の仏文科の女子大生である。母親に若い彼氏ができたことをきっかけに家から追い出されてしまい、大学の先輩である彼氏とも喧嘩中、友達が多いと思っていたはずなのに、家に置いてもらえず泊るところがない。困った杏里は、日中にはスーツケースをゴロゴロと転がして移動し、夜はネットカフェで過ごすようになる。フランス料理店で

¹³ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』同、467-473頁、及び村上春樹、同、129-139頁を参考。なお、この論文では、亀谷の思入れから、オリジナル版を参考資料に用いている。

¹⁴ 「パパ活」第1話、野島伸司「現代の新たな男女関係を描くドラマ」
(https://www.fujitv.co.jp/fujitv/news/pub_2017/170919-s072.html) 2017年9月19日、閲覧日：2018年12月31日最終確認、加えて「パパ活女子」、「ねほりんぱほりん」（NHK・Eテレ、2017年11月1日放送）を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

バイトをしているが、一人暮らしをするためのお金はない。そこで、友人に勧められて「パパ活」を始める。高額なお小遣いをパパから得ようとするが、現れる中年男性に嫌気がさして毎度逃げ出してしまう。そんな中、彼氏が杏里の友人と浮気していたという事実が発覚し、ショックを受けた杏里は半ばヤケクソで新たなパパ、45歳の仏文学者である栗山航と出会う。

栗山航は娘（実は血の繋がりはなく、彼の妻と彼の親友の子どもであった）を10年前に亡くし、娘と同じ歳・同じ誕生日の女の子を娘代わりにしようと探していた。泊るところがないと言う杏里にマンションの鍵を渡し、おやすみと言って出て行く航を、杏里は中年のおじさんにしては珍しいと不思議に思う。翌日、航は偶然に杏里の大学に講師としてやってきて、二人は先生と教え子になってしまう。初めは、10年間も娘を思い続ける航に戸惑ったが、次第に航のために、“疑似”の娘として何かしてあげたいと思うようになる。娘ができて嬉しい航は、誕生日にプレゼントを渡したり、フランス文学に関するレクチャーを個別にしたりして、杏里を娘のように可愛がる。不倫して家を出、杏里のそばに全く居つかなかった父親を持つ杏里は、長い間父親の愛情を知らずにいた。杏里のことを大事にしてくれる航に対して、パパがいるのはこんな感じなんだ、いいなあ……と思うようになる。時には航に反抗したり、実の父親に言えずくすぶっていた思いをぶついたりもするが、そんな杏里を航は本当の父親のように受け止める。

仲睦まじい「パパと娘」の関係は、航が、杏里が他の男と一緒にいることに嫉妬したり、杏里は航を嫉妬させようとしたりで、次第に男女の恋愛に発展していく。航は、杏里に恋をしていることに対し「生きるエネルギーが湧く¹⁵」と嬉しそうに言う。そして、再び現実の世界に目を向け、歩き出すことに成功

¹⁵ 「パパ活」第6話。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

する。杏里も航の優しさや包容力、愛情をもらい人生が花開くように充実していく。航は長い間不和であった妻との離婚を決意し、自らの翻訳活動と杏里のフランス文学を学ぶ留学も兼ねて、一緒にフランスへ渡ろうとする。そんな折、妻は他殺か自殺かマンションから転落して亡くなってしまう。ショックで、杏里から離れようとした航だったが、自分と一緒に生きていこうと空港へやってきた杏里に心を打たれ、人生を共にしようと二人でフランスへと出発する。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

2. ピグマリオン^{創造主}として登場する男性たち

『夜はやさし』の刊行年は1934年で、舞台設定は1920年代前後（1919年～1929年）のアメリカである。「20世紀初頭には前時代的家父長制も崩れ始め、女性が個性を主張し始める時代¹⁶」が到来し、ゼルダは「フラッパーの女王¹⁷」とも言われた。フラッパーとは、何人もの男性とデートをし、髪を短くカットし、短いスカートも履き、煙草を吸ってお酒も飲むような女性のことである¹⁸。

「アメリカの歴史をとおしておそらく最初の、生活のレベルにおける女性の反乱¹⁹」であった。新時代的な生き方をしたフィッツジェラルド夫妻であったが、この小説には女性蔑視的発言が多い。まだ、女性は男性の従属物だという風潮が根強くあったのだろうか。最初は、この作品のミソジニーを見る。ミソジニーとは、女嫌い、男性の女性蔑視、女性の自己嫌悪と訳される言葉である²⁰。ミソジニーの男には、女好きが多いという。また、女性崇拜という側面もある²¹。

ミソジニーについては、フィッツジェラルド自身に特筆すべき点がある。それは、彼の母のことである。美人でもなく、着るものにも頓着がない母に、幼い頃から見栄坊なフィッツジェラルドは嫌悪の気持ちを抱いていた²²。それどころか「母を恨んでいた²³」ともある。短編「カットガラスの鉢」（1920年）では、夫と不和になり、子育てをし、年々老い、自分の人生に希望を抱けなくなっていく中年女性の一生が、細部まで詳しく描写されている。その一方で、彼の

¹⁶ 藤本純子、同、83頁。

¹⁷ 村上春樹、同、157頁。

¹⁸ 同を参考。

¹⁹ 同を参考。

²⁰ 上野千鶴子、同、7頁を参考。

²¹ 同、42頁を参考。

²² 足立、同、16-17頁を参考。

²³ ロジェ・グルニエ『フィッツジェラルドの午前三時』中条省平訳（白水社、1999年）、32頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
小説には「父」が尊敬すべき、道徳的規準を持つ男性として登場する 경우가少なくない²⁴。『夜はやさし』ではディックの父親は聖職者、ローズマリーの亡くなった父親は医者である。「自立する娘」のイヴリンの父親も医者である。聖職者や医者という、社会貢献的で名誉ある職業に登場人物の父親がついていたことは、これと関係あるだろう。また、父の死後「The Death of My Father」というエッセイを書くなど、父には特別な愛情が向いていた²⁵。

『夜はやさし』や「自立する娘」では、主人公の父が亡くなり、彼らが帰国する場面がある。ヨーロッパからアメリカへ帰り、葬儀へ出席するところや、幼い時に過ごした父との時間を回想する場面は非常に似通った描写となっている。子どもの頃の回想シーンには以下がある。

夏になると、父子は二人連れだって町なかに出かけ、靴を磨いてもらった——ディックは糊のきいたキャンバス地の水兵服、父は決まって見事な仕立ての聖職服という格好だ——そして父親はハンサムな坊やのことをとても自慢に思っていた²⁶（『夜はやさし』）。

小さい頃、日曜の朝になるとお父さんと二人で町まで歩いて行ったものだった。私はパリッと糊のきいたドレスを着て、お父さんは町でワシントンの新聞と葉巻を買った。お父さんはよく娘の器量の良さを自慢したものだ。私はお父さんの自慢の種だったのだ²⁷（「自立する娘」）。

²⁴ 藤本純子、同、83頁を参考。

²⁵ 同。

²⁶ F・スコット・フィッツジェラルド、『夜はやさし』、同、298頁。

²⁷ F・スコット・フィッツジェラルド、「自立する娘」、『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』村上春樹訳（中央公論新社、2007年、203-250頁）、210-211頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

また、父親が亡くなり主人公たちが思うことも類似している。「生まれたときからずっと守ってくれていたこの強い人物がいなくなったいま、自分はいったいどうなるのだろうか？」²⁸（『夜はやさし』）、「お父さんはもう死んでしまって、私は一人ぼっちなんだ²⁹」（「自立する娘」）。そして葬儀に出席し、埋葬された父の墓の前で、主人公たちがこう呟いてその場を後にする。「『さよなら、父さん——さよなら、ぼくのすべての父たち』³⁰（『夜はやさし』）、「『じゃあね、さよなら、お父さん。そしてお父さんのそのまたお父さんたち』³¹（「自立する娘」）。

これらは 1931 年に、父を亡くした³²彼自身の体験であるのだろう。息子が、母でなく、父の方へむしろ愛情が向くことは珍しいことだ。フィッツジェラルドは、「僕は半分女だ³³」という発言をしている。彼の作品は、女性がするかのような繊細な描写が特徴である。特に、その中の一つ、「自立する娘」では、女性の行き場のない心情が、手に取るようにわかる。父を亡くした 20 代の女性が、父が注いでくれた愛情を思い出し、その父を亡くした今、自分は一人ぼっちになってしまったと感じている。そして恋人の横顔に亡き父の影を求め、自分を守ってもらいたいと願う。半分女だったかどうかは謎であるが、彼の父への哀悼を感じさせる作品となっている。

作中では、「ご家族のどなたか男の方とお話しした方が³⁴」、「女たちには決定権のない問題でも、とりあえず言いたいことを言わせてみる³⁵」、「ことが成る

²⁸ F・スコット・フィッツジェラルド、『夜はやさし』、同、298 頁。

²⁹ F・スコット・フィッツジェラルド「自立する娘」、同、210-211 頁。

³⁰ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』、同、300 頁。

³¹ F・スコット・フィッツジェラルド、「自立する娘」、同、224 頁。

³² 足立富美、同、205 頁から。

³³ 原典は「I am half feminine--that is, my mind is.», HEARNE Laura Guthrie, «A Summer with F. Scott Fitzgerald», *Esquire*, December 1, 1964, p.258. 和訳は、永岡定夫『フィッツジェラルド研究余滴』（英宝社、2003 年）、24 頁。

³⁴ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』、同、233 頁。

³⁵ 同、258 頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

まで女には黙ってる³⁶」とディックが発言している。これらの発言は、女性を蔑むもので、女性に対する彼の支配的な態度を明らかにしている。女性は、話も通じず決定権もない。すなわち、物事を理解できない、知性がない、と言っているようなものでもある。そして、彼女たちは、自分では物事の尺度が分からず、意思決定できない女性として登場する。判断などはすべて、男性まかせで、頼りきっている。論理的に物事を考え、指導するのは常にディックなのだ。ニコルは自分自身に、実家が金持ちで彼女にも莫大な資産があることや、美しい容姿以外に価値を見出せない。自らを、男性の目を通してしか評価できないのだ。そうしてつねに、自分の保護者である、ディックの顔色を伺っている。だから彼に楯突くことはないし、「わたしがディックにああしろこうしろなんて言えるわけじゃないじゃない！³⁷」と言う。意見することもない従順な妻である。これはおそらく、彼女の父親デヴェルーに対しても、従順な娘であったのだろう。そしてそれだけではない。「お話しするときは、わたしはきっとディックなんだって自分に言い聞かせる³⁸」というように、ニコルはディックになりたいとも思っている。同一化欲求である。もっと言えば、男性そのもの、になりたいと思っているのだ（「うちの息子 [ラニア] になってみたこともある（中略）ドームラー先生 [療養所の精神科医（男性）] にも³⁹」）。女性という、誰かの娘で、誰かの妻で、誰かの母親でいるしかないことへの脱力でもあるのだろうか。弱い、時には搾取される女性、という存在から、強い男性へ仲間入りを望む⁴⁰ことは、ディックへの同化を加速させるものとなる。そして、ますます、フラフラしていて自分では何をして良いかも分からない、という彼女を浮き立たせ

³⁶ 同、365 頁。

³⁷ 同、400 頁。

³⁸ 同、238 頁。

³⁹ 同。

⁴⁰ 原田武『インセスト幻想——人類最後のタブー』（人文書院、2001 年）、160-161 頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ている。

登場人物の女性（ニコル、ローズマリー、そして夫妻の友人であるメアリー・ノース）は、男に対抗することによってではなく、その存在を通して、女性の個性を維持しているとディックは考える。そしてそれが、男の世界に存在しながらも幸せでいられる理由だとされている。彼女たちは自分の男が見つかるかどうかによって、「第1級の娼婦にも良妻にもなりえた⁴¹」という。この娼婦と良妻、という二項対立的な区別は、性の二重基準である。性の二重基準(**sexual double standard**)とは、男性向けの性道徳と女性向けの性道徳が違うことを指す。男性は色好みであること、女性は無垢で無知であることが良いとされる。近代(18～19世紀)、一夫一婦制が主流となるが、“退屈な”妻以外に、男性の欲望の相手をしてくれる女性が必要となる。この時期、同時に、産業として売春宿が成立するようになった⁴²。一見、この二つは全く別物に見えるかもしれないが、本質は同じである。男性にとって都合の良い女性、ということだ。ただそれが、社会的には正当な立場を持つ“妻”か、逆の“愛人”か、というだけのことである。自我をもたず、男性に従順で、外見は可愛く美しい、お人形のような女性を所有することが、男性にとっては望ましい。彼の自尊心が満たされ、また視覚的にも嬉しい、この二つは必須である。つまり、ニコル他登場人物の女性たちは、第1級の男性にとって都合の良い女性たち、とも解釈できよう。そして、男性に取り入るのが最高にうまい女性たち、ともだ。

そして、女性蔑視は、女性崇拜とも同義である。医者という責任の強い立場にいながらも、ディックはニコルと彼女の美しさに、我を忘れるほどのめり込んでしまい、それに抗えなくなる。そして結婚前に、ニコルとのこれからにつ

⁴¹ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』、同、80頁。

⁴² 上野千鶴子、同、42-43頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

いて「あの娘に一生を捧げろと？」⁴³と彼は同僚に問う。そうして彼女の人生を背負うと決めた時には、「彼女の問題はいまや永遠に二人のもの⁴⁴」になる。治療者であるディックは、彼女の夫にもなる。精神を病んで、時折発作を起こすニコルに辛抱強く向き合い、愛し続ける姿が、小説では印象的だ。一生ではないかもしれないが、文字どおりニコルに人生を捧げたのは確かである。ディックはニコルを所有する一方でまた、彼女に対して責任も負う。彼女は無力な蔑視される女性だけではない。大切にされ、守られ、慈しみの対象でもある。すなわち崇拜の対象でもある。女性蔑視と女性崇拜は一見相反しているように見える。しかし、彼が所有しているものは、彼にふさわしいそれなりのものでなければならぬから、崇拜の対象となるのは当然かもしれない。

ここで逆説的な問題も浮上する。女性を蔑み、教育する側で、支配的な男性でもあるピグマリオン^{創造主}⁴⁵は、無力で可憐な、自分の助けを必要とするガラテアを本当に望むのだろうか。彼らは、能力も高く、自身への評価が高い男性たちである。すなわち、相手に求めるものも大きい。彼らは、女性に、ピグマリオン——彼ら自身になることも望むのではないか。パパと娘、ならなおさらである。「父と娘が密接な関係で結びつく主なきっかけが、広義のいわゆる『ピグマリオン・コンプレックス』にある（中略）いわゆる教育欲求である⁴⁶」、という。パパは娘に、女の子らしい可愛らしさ、を求める反面、自分のようになることを望みもする。勉強もできれば、スポーツもできる。その他もろもろ、もだ。

⁴³ F・スコット・フィッツジェラルド、同、204頁。

⁴⁴ 同、232頁。

⁴⁵ 現実の女に嫌悪感を抱き独身生活を守るピグマリオンは、自らが創った象牙像のガラテアに熱い恋に落ちる。そして「神々よ、すべてを与えることがおできになるのなら、どうか、わたしの妻として象牙の乙女に似た女をいただけますように！」と祈る。それを聞いたウェヌス女神が、像に生命を与えて、ガラテアはピグマリオンの妻になる。バーナード・ショーの『ピグマリオン』のモチーフとなったギリシャ伝説。オウイディウス『変身物語』（下）中村善也訳（岩波文庫、1984年）、73-77頁、加えて『大辞林』、同、2117頁と金田一春彦編『パーソナルカタカナ語辞典』（学研、1999年、電子版）を参考。

⁴⁶ 原田武、同、164-165頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

あれが終わったら、これ、というように一つずつ、しかし延々と、娘にレクチャーを始める。お前のためなんだからね、と言って、自らの理想をせっせと創りあげはじめる。そうして、強さを持った、男性と同等の女性となることを望む。しかし、忘れてはならないのが、その完璧な理想像には、いろいろできるものの、パパの前では可憐で無力な可愛らしい存在でいる、ことが必ず含まれていることだ。

パパにとって、娘は自分の分身でもある。その分身の彼女を可愛がることは、ちょうど父が自分自身を愛しているという自己愛的な側面も無視できないだろう。そしてその彼女を所有して、自分の理想を実現する。エゴイスティックな話かもしれないが、それは本来、生来の、社会に生きる前の状態の、人間のあるべき姿なのであろう。ちょうど、眠たくなったら眠って、お腹が空けば食べるといったようにである⁴⁷。

そして、娘は、もう一人の自分というだけではない。異性である。よって、彼女は、パパのこれ以上ない理想——お人形でもある。これは、ミソジニーに関係しないだろうか。女性蔑視、女性崇拜という矛盾する性質を併せ持つミソジニーに、似ている。そしてこれはトートロジーのような話になってしまっている。正しくは、ミソジニーの原型——ピグマリオン・コンプレックスなどは、父と娘の関係に端を発しているからだ（『ロリータ・コンプレックス』とも、『ピグマリオン・コンプレックス』とも呼ばれる男の性的嗜好の淵源は、父の娘に対する関係を原型としているにちがいない⁴⁸）と上野千鶴子は述べる）。文字どおり、パパは娘のピグマリオン（創造主）なのである。つまり、パパは娘に対して猫可愛がりをする一方、彼女をお人形のように、自分に都合の良いよ

⁴⁷ こちらも参考に。「フロイトの『原父殺し』の説話では、原初の父親は娘たちのすべてを性的に独占していた」原田武、同、158頁。

⁴⁸ 上野千鶴子、同、162頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
うに扱ったりする。そして細々とピアノやら料理やら女の子らしい所業を身につけさせ、満足する。勉強やスポーツも、彼女は身に付けなくてはならない。そうして自分の理想に育て上げ、一方で崇拜もする。これこそが、ミソジニーの原初とでもいべきものである。女性が自分のことを、誰かの娘であるのだ、と認識するのは、自分が（性的な意味で）女性だと気づく前だろう。パパとの関係は、女性が人生で最初に、ミソジニーという何かを察知する場面なのである。

以上のような構造が二作品ではどのように表れているだろうか。ドラマ「パパ活」では、航は仏文学者で、杏里の学ぶ大学の講師でもある。二人は先生と教え子なのだ。フランス文学について、大学の講義以外にも、杏里にマンションや電話でレクチャーをしている場面⁴⁹がある。この、教える側と教えられる側に男性と女性が分けられていることは、当然のことながらピグマリオンを思い出させる。加えて、彼らは疑似ではあるが、パパと娘、なのである。先生と教え子、パパと娘、この二つが重なっていることは、物語のピグマリオンの要素を濃くしている。

『夜はやさし』でも、ディックの興味深い言葉がある。ニコルに対して「彼女には今後教えてやらねばならないことが山ほどある⁵⁰」、そしてローズマリーに対しても「教えることがたくさんありそうだ⁵¹」、とディックが思っている。そして「ローズマリーを作り上げることなら、彼[ディック]にもできたかもしれない⁵²」、ともある。これらは彼のピグマリオンの顔を明らかにしている。一方で、「もともと男女の愛一般が、教育し教育される喜びと切り離すことがで

⁴⁹ 「パパ活」第4話。

⁵⁰ F・スコット・フィッツジェラルド、同、226頁。

⁵¹ 同、97頁。

⁵² 同、243頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
きない⁵³」とも言う。とすれば、ディックが、ニコルやローズマリーを指導する
という構図は、自然なものでもあるのかもしれない。「パパ活」の、“先生”の
航と“教え子”の杏里も同様である。

しかし、そんなディックは、ローズマリーの浮ついた恋の対象であった⁵⁴。
加えて、自分でものを考えることのできないはずの妻ニコルは、最終的には強
くなり自分の道を選択し、ディックのもとから去っていく⁵⁵。バーナード・
ショー『ピグマリオン⁵⁶』（1912年）のヒギンズ教授から、イライザが去って
いったようにである。ところで、バーナード・ショーとフィッツジェラルドは
同時代を生きた人である（ショーは1856年生1950年没、フィッツジェラルド
は1896年生1940年没）。フィッツジェラルドの書簡に、舞台用台本を手がけ
たエドウィン・ジャレットに宛てた物があり、ショーが言及されている⁵⁷。支
配的な男性から女性が自立して彼の元を去っていくという、シニカル(冷笑的)
ともいえるエンディングを、両作者がとっていることは興味深い。「前時代的
家父長制」が崩れ始め、女性が自立していく。そして男性はその傍観者となる。
そんな20世紀前半の風潮とでもいうのだろうか。

「パパ活」のシンボルとして、東京タワーが登場する。近辺で撮影は行われ
ており、航が杏里に貸したマンションの部屋は、タワーの真正面にある。そし
て夜に、東京タワーと一緒に眺めながら、話に花を咲かせている場面が作中
では多い。それらの場面で話していることが、パパと娘、にまつわるというこ
も興味深い⁵⁸。東京タワーがこの物語のシンボルになっているのはなぜなの

⁵³ 原田武、同、165頁。

⁵⁴ 彼女のディックへの想いは本気の恋でもあるし、少女の若気の至りの恋、でもある。

⁵⁵ 詳しくは、3・4章で論じる。

⁵⁶ ロンドン下町訛りを話す若い花売り娘、イライザを、音声学教授のヒギンズが、正しい英語発音を教育し一流のレディに育てる物語。

⁵⁷ ショー風の長台詞は、ディックが話すと舞台では生きないのではないかとフィッツジェラルドは案じていた。F・スコット・フィッツジェラルド、同、586頁。

⁵⁸ 航の亡くなった娘の話をしたり、「大人になったら時にママを置いてパパと二人で」、「買い物に出

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ろう。塔、は何を意味しているだろうか。

『ピグマリオン』では、自立するイライザに対してヒギンズが、自分の重い負担であった彼女が「今や立派にそびえたつ塔だ⁵⁹」、と感心している。『夜はやさし』では、自分に助けてと泣きついてくるニコルに対して、「これほど美しい塔なのに、自力ではまっすぐ立っていただけ、ただぶら下がっているだけ、この自分にぶら下がっているだけだ⁶⁰」、とディックが脱力している。ここで、ヒギンズやディックら、ピグマリオンが塔に絡めて女性のことを言っている。塔は自立しているもの——すなわち若く力のない女性とは対をなす、経験豊富で社会的地位が高く、年上で、力のある男性を仄めかす象徴なのでないか。塔と、弱い女性とを、あえて例えることによって、塔の本来意味するもの——自立している男性⁶¹を暗に示唆する。それによってピグマリオンたち——男性が、女性の無力さを浮き彫りにしているとも言えよう。

では、問題の「パパ活」ではどうだろう。航は、ディックとは表面的には異なる。女性蔑視的発言もしない⁶²。両作品は、国は違えども、20世紀と21世紀というおよそ100年の隔りがある。ディックと航の発言の違いには、時代背景も大いに関係があるだろう。女性に注目すると、従順なニコルに対し、杏里はなかなか反抗的である。男性に対して、思ったことを言うのをためらわない。浮気した恋人（大学の先輩）には「何なんだよ、はお前だ！⁶³」と言い、航

かけたり」、「映画を観たり」、「お酒を飲んだり」、「旅行に行ったり」（中略）など二人で仲睦まじく話す姿が印象的である。「パパ活」第2話。

⁵⁹ 原典は«Now you're a tower of strength», SHAW George Bernard, *Pygmalion*, Dover Publications, 1994, p.41. 映画「マイ・フェア・レディ」の日本語字幕を参考に亀谷訳。なお小田島恒志訳（光文社、2013年）、233頁では「今は、君は頼れる存在だ」となっている。

⁶⁰ F・スコット・フィッツジェラルド、同、280頁。

⁶¹ 塔は“屹立するもの”であることから男性を表すシンボルでもある。

⁶² 専業主婦に渡す生活費は「セックス込みの生活費だろ」とジョークで杏里に言っている。「パパ活」第6話。

⁶³ 同、第2話。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
には「ウザッ、マジ、お前が死ねって感じ！⁶⁴」とも言う。彼女にとっては、ピグマリオンなどどこ吹く風、というものである。すがすがしいほどの言葉だが、21世紀だからあり得ることでもあるのだろう。

女性にはそんな違いがあるが、男性も違うだろう。支配的な男性のディックと比べて、航は静かで人の話をよく聞く男性である。ピグマリオンのように、男尊女卑的な思考を持っている印象は受けない。しかし、彼らは大学の先生、と教え子なのだ。航は仏文学者で、杏里の大学で教鞭を取る。その杏里は学生で、年若く経験も浅い。加えて、彼らはその一方で、パパと娘、でもある。航からすれば、杏里は無力な女の子である。その彼女にマンションを貸し、プレゼントを渡す。そして時には、パパとして叱る。杏里が若い男といると、嫉妬もする。ひっそりと、ピグマリオン——航の支配的な男性の顔を明らかとするものかもしれない。

イライザがヒギンズと出会い、人生が変わったように、事実、杏里は航と出会い成長する。「グダグダのそこらへんに転がってる⁶⁵」女子大生が、「危うきだろうが近寄って、好きな人なら抱きしめたい⁶⁶」と言う強い女性に変貌を遂げる。航——男性との出会いにより、杏里——女性の人生が変わる。この構図は、典型的なピグマリオン譚である。杏里の強さは、航と出会い、彼によって授けられた力なのか。あるいは、航が授けた力ではなく、彼女自身が、もともと秘め持っていたものなのだろうか。答えは両方だろう。自分とは世代も違い、経験も深い航に多くの刺激をもらう⁶⁷。そうして彼女の人格は、拡大し深化し

⁶⁴ 同、第4話。

⁶⁵ 同、第6話。

⁶⁶ 同、第8話。

⁶⁷ 航は杏里のパパでもあることから、こちらを参考とした。「父親というものは、これ以上ないほど娘とちがう——父親は男であり、別の代に属する。このことこそ、娘のパーソナリティを刺激して拡大・深化させる能力を父親に与えているものなのである」アンドリュー・サミュエルズ編『父親——ユング心理学の視点から』小川捷之監訳（紀伊国屋書店、1987年）、54頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ていく⁶⁸。彼女自身の強さが、航と出会うことによって、開花したということ
なのだろう。

そして、塔、だけでなく「東京」タワーである。1958年「まだ戦災の被害が
痛々しい区画が残る市街地⁶⁹」に「あきらかにエッフェル塔が意識された⁷⁰」、
東京タワーが電波塔としてそびえたった。かつて、今のように高層ビルなどな
い戦後の東京を見渡し、「東京という都市が生んだ独自のランドマーク⁷¹」とし
て「『一種のあこがれのシンボル』⁷²」であった。しかし「都心に超高層ビルが
林立するようになった結果、東京タワーから送られる電波では各所で障害が生
じるようになった⁷³」。そうして新たに、東京スカイツリーが建設されることにな
る。

航は仏文学者でフランス文学の翻訳家であり、杏里は仏文科の大学生でフラ
ンス料理店でアルバイトをしている。ドラマに漂うフランス色とも、関係があ
るのかもしれない。エッフェル塔はフランス・パリのシンボルでもある。二人
は今後、海を渡り、エッフェル塔がそびえたつ憧れの地⁷⁴フランスへ彼らの人
生の拠点に移る。日本の首都・東京とフランスの首都・パリという2都市を関
連づけるランドマークとして、東京タワーは、来たるべき二人の将来の人生や
生活を予測させるものであるのかもしれない。

あるいは、古いものである東京タワー（1958年竣工）⁷⁵と、新しいものであ

⁶⁸ 同。

⁶⁹ 橋爪紳也『ニッポンの塔——タワーの都市建築史』（河出書房新社、2012年）、73頁。

⁷⁰ 同、71頁。設計者の内藤多伸自身、「エッフェル塔そっくり」だと言われるのは「人が人に似ている
ようなもので、一理ある見方」と言っている。同、84頁を参考。

⁷¹ 同、84頁。

⁷² 同、81頁。なお、原典は『月刊東京タワー』1973年4月号。

⁷³ 同、174頁を参考。

⁷⁴ 「心は花の都、パリ」と杏里が嬉しそうに言っている。「パパ活」第7話。

⁷⁵ 2018年12月下旬、いつもとは異なる特別なピンクカラーのイルミネーションで「60」の文字がタ
ワーにあった。60歳おめでとう。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

る東京スカイツリー（2012年竣工）は、そのまま年齢を表している可能性もある。すなわち、東京タワーは、杏里にとって航くらいの年齢の男性（中年男性）を表しているもので、スカイツリーは同じ歳（20歳前後）の男性を表している。かつて隆盛を極めたが、今は静かに佇む。疲れることも多くなった、下降を感じたこともある。そして新しいものに追い抜かれる。新しいものには「ふるびたものを、あなどる気持ち⁷⁶」もある。杏里のような若者に、航を含む中年の男性は「すこしの軽蔑⁷⁷」をもって見られることもあるだろう（とくにパパなどは娘から「パパなんてありえない、まじウザい⁷⁸」「まじでキモい⁷⁹」と言われることもあるかもしれない）。

しかし中年男性というのは、足場がまだ整っていない若者と比べて、彼らの人生経験値は高く、確かな安定した存在である。少々くたびれてはきたものの、それが持つ根本的なもの——すなわちその人自身のパーソナリティ、夢や理想を追い求める気持ち、人を魅了する力は今も昔も変わらない。強いものは年が経っても折れない⁸⁰——東京タワーも彼らもだ。ふるいもののよさ、が再認識される。そうすると東京タワーは、東京という街のアイデンティティの回帰先の一つでもある。そこから、杏里が自身のアイデンティティへ、つまり自らのピグマリオン——実の父親へ回帰しているのかもしれない。実の父親からは愛情をもらえなかったから、20歳になった今、父親・パパという存在へ還る。そして“契約”パパとなった航の温かい愛情をもらうことになる。

そんな二人の出会いはパパ活で、東京はパパ活の本拠地である。つまり、東京タワーはずばりパパ活そのもの、を表すシンボルだという可能性もある。ま

⁷⁶ 桜庭一樹『私の男』（文藝春秋、2007年）、7頁。『私の男』については3・4章で論じる。

⁷⁷ 同、7頁。

⁷⁸ 「パパ活」第4話。

⁷⁹ 同。

⁸⁰ 以下の一節を参考にした。「The old that is strong does not wither», TOLKIEN J.R.R., *The Fellowship of the Ring : being the first part of The Lord of the Rings*, George Allen & Unwin Ltd, 1966, p.182.

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

たは、パパ活という現象が席卷している東京そのもの、の象徴であるのかもしれない。そして、それが、新しいスカイツリーではなく、旧い東京タワーであるのは、「私たちの悩める魂のあり方は、時代がうつろっても、そして『パパ活』という新たな現象においてだって、もしかしたらさほど変わっていない⁸¹」ことを表しているのかもしれない。

2章では、「ピグマリオン（創造主）」というキーワードから二作品を分析してきた。ピグマリオンは、自分よりも立場が弱い女性に対して教育し、支配する、往々にして年上の男性のことである。ミソジニーという論点から、彼らは男尊女卑的思考ももつ。年上の男性と、年下の女性、そして教育する側と、教育される側に男女を分けるこの構図は、“パパと娘”の関係に端を発している。つまり、パパは娘のピグマリオンである。『夜はやさし』の男性主人公ディックは、『ピグマリオン』のヒギンズのように典型的なピグマリオンであることが判明した。「パパ活」の航については、ピグマリオンだと言い切ることは難しいが、彼の職業や行動からひっそりとピグマリオンの顔が明らかとなった。そして『夜はやさし』や「パパ活」には「塔」というキーワードが登場する。塔は「自力でそびえたつ」ものなので、誰かの手を必要とする弱い年下女性とは逆に、社会的地位や経済力のある年上男性のことを指すものだと思われる。そして“塔”と“女性”とを一緒に登場させることによって、ピグマリオンたちが女性の無力さを浮き立たせている。東京タワーは、「パパ活」のシンボルとしても登場する。これは、ピグマリオン以外にも、エッフェル塔との関連づけや東京スカイツリーとの比較などにより、様々な意味を持つ可能性がある。

⁸¹ 宮田文之「密やかな社会現象『パパ活』とは？野島伸司脚本ドラマをレビュー」飯島藍子編 (<https://www.cinra.net/review/201706-papakatsu>) 2017年6月28日、閲覧日：2018年12月31日最終確認。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

3. 発達段階におけるタブーとしての近親相姦^{近親相姦}

『夜はやさし』の中核は、ディックを夫としても医者としても悩ませ、また二人の出会いのきっかけでもあるニコルの精神病（統合失調症）である。そしてその原因となったのは、まだ幼かったニコルと、実父との間に起きた望まない近親相姦⁸²だった、と作中でされている。ニコルの母は、ニコルが11歳の時に亡くなった。妻を亡くした30代の父親と、母親を亡くした11歳の娘（ニコル）はその分、非常に仲の良い親子になる⁸³。そうしていつの間にか、娘を可愛く思うあまりなのだろうか。父親が、10代前半の娘に対して近親姦に及んでしまう。

以下の引用は、「きわだってハンサムな男で、歳は四十前に見えた。長身で肩幅が広く、がっしりとした体格、あらゆる点で最高の部類のアメリカ人といった感じ⁸⁴」のニコルの父親デヴェルー・ウォーレンが、精神を病んだ彼女を診療所に連れてきて、医師から再度、ニコルについて詰問されている時のシーンである。

子供の時分に母親を亡くして以来、娘は毎朝わたしのベッドに入ってくるようになって、ときにはわたしのベッドで眠ったりもしていました。わたしにしてみれば、あの子がかawaiiそうではなかったのです。そう、あれ

⁸² 現在では、立場の弱い者への搾取、そこに合意があるとは考えられないことから、相姦という言葉が不適切だという見地に至っており、近親姦という言葉が用いられている。石川義之『親族による性的虐待——近親姦の実態と病理』（ミネルヴァ書房、2004年）、1頁と、BUTLER Sandra, *Conspiracy of Silence: the trauma of incest*, Volcano Press, 1978, pp.4-5を参考。

⁸³ ニコルには姉もいるが、姉と父親の仲の良し悪し等については言及されていない。専ら父の愛は「愛情深い、かわいい娘」（F・スコット・フィッツジェラルド、同、186頁）のニコルに向いていたか。

⁸⁴ 同、185頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
以来、自動車や車で出かける時はいつでも、わたしたちは手を握り合うようになりました。あの子は歌を歌ってくれたりもして。二人でよく言い合ったものです、『さあ、今日の午後は他の連中なんか放っておこう——二人だけで過ごそうね——今朝はわたしだけのものになって』（中略）「まわりはみな言っていましたよ、なんて仲のいい親子なんだろうって——目頭を押さえながらね。わたしたちはまるで恋人同士のように——それが突然、恋人同士になってしまった——そうってしまった十分後には頭を打ち抜くこともできたでしょうが——ただどうやらわたしはどうしようもなく腐りきった人間のように、そうするだけの勇気もなかったのです」

「で、その後は？」（中略）「そういうことが続いたのですか？」

「いや、まさか！ あの子はほとんど——あの子はみるみる凍りついたようになってしまっただけです。ただただこういうのです、『いいのよ、気にしないで、パパ。たいしたことじゃないわ。気にしないで。』」

「その行為に結果は伴わなかったのですか？」

「ええ（中略）ただ、いまや別の結果がたっぷりと表れてしまったようですが」⁸⁵

優しい、自分を愛してくれている父親が、ニコルに対してインセストに及んだことは、彼女の人生に大きな影響を及ぼすことになる。自分が信頼しきっている男性の背後にある欲望に恐れを感じ、インセストの罪が自分にもあると思う。自分に責任はない、と思うために、男性はみんないやらしいことをする、という妄想を作り上げ自分を守っているという⁸⁶。精神を病み、入院するが、

⁸⁵ 同、190-191 頁。

⁸⁶ 同、192 頁から。診療所の医者で、ディックの友人でもあるフランツ・グレゴロヴィウスが、ニコルの容体をディックに説明した内容である。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

医者であったディックに恋をする。つまりは、10歳年上の精神科医であるディックに、ニコルは「転移⁸⁷」感情を持つ。その転移というのが、彼女の父親への愛情がディックに移ったものなのではないか、という着眼もある。

「ディックはニコルの愛情を転移という形で受け取るわけだが、それはつまり、元は子ども[ニコル]から親[デヴェルー]へと向けられていたものである⁸⁸」。

そしてデヴェルーだけではない。ニコルと結婚した、二人の子供の父親である、主人公ディックについてもインセストについて述べるべき点がある。彼の、娘トプシーに対する感情には、息子ラニアとは違う特別さが窺える。ローズマリーに心を奪われていることについて、「彼女の若さには心惹かれるものがあるが、それだけならトプシーだって同じだ⁸⁹」と思っている。ディックは、ローズマリーよりも17歳年上である。出会った時は、彼女の年齢のちょうど2倍であった。この4年後に、二人は性的な関係を持つことになる。そんな性愛の対象であるローズマリーに、彼の娘であるトプシーを引き合いに出しているのだ。偶然かどうか、ローズマリーもトプシーも流暢なフランス語の話し手であることも、彼女たちの類似性を浮かび上がらせている。彼の娘トプシーとは、無論もっと歳が離れているが、17歳差というのが、彼に彼女と娘を比較させるような、そう思わせるものがあつたのだろうか。

⁸⁷ 同、176頁。以下は参考として。転移とは、フロイトが見出した心的現象の一つ。患者の幼児期における重要な人物（例えば両親など）に寄せた感情、欲望、観念などが分析者に向けて展開されること。転移には、感情の質により、陽性転移や陰性転移に分けられ、両転移が起こっている場合もある。対象の性質により、父親転移や母親転移などにも分けられる。転移状況に入るとしばしば病苦を忘れたように、分析者を想い一時的に症状が消失する。これを転移性治癒という。また、多かれ少なかれ患者だけではなく分析者も、転移に無意識に感情反応を起こす。これは逆転移と呼ばれる（下坂幸三）。下中直人編、同、19巻、251頁を参考。

⁸⁸ WEXEIBLATT Robert, «F. Scott Fitzgerald and D.H. Lawrence: Bicycles and Incest», *American Literature*, vol. 59-3, Duke University Press, 1987, p.384 から亀谷訳。また、ニコルの父への愛情がディックに転移したことを推測させる箇所が作中にもある。入院中のニコルがディックに宛てた手紙に、療養所から離れていたディックに自分のところに帰ってきてほしい、それが無理なら「心から愛してるお父さまに」手紙を書かせてもらいたい、とある。F・スコット・フィッツジェラルド、同、178頁。

⁸⁹ 同、304頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

17歳のローズマリーは、映画が大ヒットした旬の女優として登場する。その映画というのが、「パパのお気に入り」である。「ラストはローズマリーと父親が結ばれる感動的なショット。あまりに露骨なファザコンぶり⁹⁰」という内容だ。

このようなネーミングで内容の映画が登場すること、しかもそれはローズマリーの代表作である。これらは、パパと娘の特別な関係という事象から無関係ではないだろう。また、彼女の父親はすでに他界している。ディックが医者だと知ったローズマリーは、「まあっ！⁹¹」と嬉しそうに笑い「うちの父も医者だったの⁹²」と話す。そして、父親と同じ職業のディックに、恋に落ちていくというのは、偶然ではない。この二つ、彼女の代表作が「パパのお気に入り」であること、そして年上のディックに恋に落ちることは、ファザコン的要素——パパと娘、を物語にひっそりと付け加えている。

そして、ローズマリーはみずみずしい女優というだけではない。彼女は、無垢な少女としても登場する。夫妻の、性的なやりとりの言葉には、意味が分からず首を傾げているのだ（「ローズマリーはまだ若く、（中略）純真で物事を信じやすい⁹³」ともある）。「パパのお気に入り」の子ども——娘、を示唆する存在でもある。そうすると、ディックに恋に落ちるのは、パパに恋に落ちることもある。彼と恋愛関係になり性的関係を持つことは、パパと娘、の近親相姦的關係を暗に示唆するものでもあるのだ。「ディックのローズマリーへの恋は、チャイルドレイプを示唆し、娘に向けるようなのぼせあがりも見られる⁹⁴」とWexeiblattは述べる。妻ニコルとは、10歳差であるが、娘と比較したりするよ

⁹⁰ 同、103頁。

⁹¹ 同、93頁。

⁹² 同。

⁹³ 同、52頁。

⁹⁴ WEXEIBLATT Robert、同、384頁から亀谷訳。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
うな描写はない。しかし、ニコルの父がディックに転移した、ならば彼はニコルの父親に近い存在である。ニコルにとっては、父親に近くとも、ディックにとっては、彼女は妻以外の何者でもない、ということなのだろうか。

「パパ活」では、航と杏里は45歳と20歳で、25歳差である。そして彼らは、見ず知らずの他人同士から、“疑似”のパパと娘になる。やはり、ここでも、若い女性の方は、男性から娘に見られている。そして男性はパパと呼ばれている。これらは偶然ではない。歳という観点からだけ見ると、おそらく、17歳差というのはパパと娘の「入り口」で、25歳差というのは、パパと娘の関係になるために十分すぎるほど歳が離れているのだろう⁹⁵。若い女性が、自分の年齢の倍以上の男性を、しばしばパパと呼ぶこともある⁹⁶。

そしてこんな言葉もある。ディックは、幼少時代における子供の躰を重要視した。そのため子供が規範から逸脱した時には、厳しく叱る父親であった。そんな時、「トプシーがぼくのことを<大好き>かどうかなんてどうでもいい。将来結婚しようと思って育ててるわけじゃないんだから⁹⁷」と言っている。この時、息子ラニアに対しては、何も述べられてはいない。娘を叱る際に、父親というものは何か気が咎めるのだろうか。それとも、可愛い娘を叱ってしまって、娘に自分が嫌われてしまうことを恐れているのか。あるいは、その両方か。気が咎めるのは、娘に嫌われてしまうのがいやだから、というようにである。娘に自分が嫌われること、つまり、自分を受け入れてもらえなくなることへの不安は、父親にとっては大きいものだろう。なぜなら、時に、そして多くの場合、愛情は一方通行では成立しないものだからである。自分が相手へ愛情をあ

⁹⁵ 参考として、他作品でのパパと娘の歳の差は、桜庭一樹『私の男』（同）では16歳差、倉橋由美子『聖少女』（新潮社、1965年）では20歳差である。

⁹⁶ 倉橋由美子、同、13頁を参考。

⁹⁷ F・スコット・フィッツジェラルド、同、378頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

げた暁には、相手からの愛情も欲しいと思うのは、至極、自然なことだ⁹⁸。親という役割に回っていても、自分を承認してほしいのである。

たとえその関係が一方通行であっても、割り切れる場合もある。その時はそもそも、相手に対して特別な感情は抱いていない可能性が大きい。自分を受け入れてもらわなくても、自分の自我が崩れていかない、あるいはダメージを受けない、そんな関係の時である。そして、熱烈な、性が絡む愛でない時だろう。そのような愛情に、エゴイスティックな側面は切っても切り離せない。自分という存在の承認を求める気持ち、嫉妬や独占欲は付き物となる。そうして、こと娘となると、彼女から嫌われてしまうことは、まさに割り切れないものなのだ。娘は、叱られて反発や反省の気持ちを抱く横で、父親自身がダメージを受けてしまう。「いわゆるロリータ・コンプレックスのように幼い娘を舐めるように可愛がるのも、嫉妬を交えて年頃の娘にしつこく干渉するのも、単なる『役割』を超えた愛の実感を追い求めてのこととして理解できる⁹⁹」と原田武は述べる。父親は性別の違う娘には、「親」という役割を超えて、愛の実感を求めているのである。

そして、結婚しようと思って娘を育ててるわけではない、というのは裏を返せば、娘を結婚相手として見てもいる、という含意でもあるだろう。娘との結婚は、父親にとって特別なもので、自分がその相手になれないことは、残念なことなのかもしれない。アナイス・ニン¹⁰⁰は、父に恋した少女であり、女性だった。幼少期に、ニンの父親は家を出る。彼女はその後の人生においてずっと、父の影から逃れられない。「世界中を……無邪気に父を探して、灰色の髪の人に

⁹⁸ 倉橋由美子『聖少女』にはこうある。「どんな感傷的でない男でも、自分が愛しているかぎり女からも愛されることを望まないわけではないでしょう」倉橋由美子、同、271頁。

⁹⁹ 原田武、同、163頁。

¹⁰⁰ 日記作家、性愛小説家。1903年～1977年。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
恋をしたり……父を象徴するものすべてを愛したり¹⁰¹」、といったようにだ。父が、成人した彼女に再会した時、言った一言がある。「私が追いかけた女たちの持っていたすべてが、お前のなかにあるのがわかったよ、だがお前は私の娘だから結婚はできないね¹⁰²」。こう言った直後に、彼はアナイスとインセストに及ぶ。娘は父親の理想であり、その娘との結婚を望むことは自然なことなのだろうか。そして、結婚という言葉を行った後、性行為に及ぶことも何か意味があるのだろうか。

そもそも初めに、なぜ娘との結婚という考えが湧いてくるのだろうか。「若さの盛りにあるわが娘へのインセスト願望には、父親の側で、妻の取り替え、第二の結婚という夢が託されている。若返った妻を手に入れることで、新鮮な自己の再生の夢も叶えられるのである（下線強調は亀谷）¹⁰³」。こう考えれば合点がいく。父親は、父親という役割を演じているに過ぎない。父親という役回り以前に、彼は男として、自分よりも格段に若い娘は、手近な魅惑の対象となる。若さに憧れ、彼女と結婚、あるいはそれを象徴する行為——性行為によって、癒され、若返った気分になる。そうして彼自身も復活を遂げる。アナイスの父親が、彼女にインセストに及んだのは、初老のために腰を痛め、ベッドに臥せている時である。すなわち、生の反対の事象——日に日に迫り来る老いと、近づいてくる死、への抵抗であるのかもしれない。娘のあふれんばかりの若さや花のような瑞々しさにあやかり、自分も活力を取り戻そうとするということだ。そして、『夜はやさし』のディックも同様である。人生に疲弊し、もはや若くない。そして彼自身に希望を抱けなくなっている時期に、トプシーと結婚、という言葉が出たのだ。

¹⁰¹ アナイス・ニン『人工の冬——アナイス・ニンコレクションⅢ』木村淳子訳（鳥影社、1994年）、107頁。

¹⁰² 同、110頁。

¹⁰³ 原田武、同、164頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

これらの言葉が小説中に見られることは、作者のフィッツジェラルド自身に娘がいたことも関係あるだろう。彼の娘の名前は、スコッティ（Scottie）である。『夜はやさし』のトプシー（Topsy）と、音が似てはいないだろうか。トプシーへの言葉は、フィッツジェラルド自身が、娘のスコッティに対して思ったものだったのかもしれない。スコッティの母親であるゼルダは、精神病のため、入退院を繰り返しており、不在の時間が多かった。そのため、（デヴェルー・ウォーレンが話したセリフのように）彼は父親と母親どちらもの役を務めなければならなかった。自分が幼い頃、母に甘やかされて育った彼は、愛情深い反面厳しくもある、理想の父親になろうと努力したという。「感情が最も色濃く反映され、または最も親愛の情に満ちた手紙は娘スコッティに宛てたもの¹⁰⁴」である。彼女に送った手紙にこうある。「今後パピーと呼ばれたら、これからおまえをエッグと呼ぶことにしよう。人生のごく最初の段階にいるという意味だ。パパがその気になればひびを入れて割ることだってできるという意味もある（下線強調は亀谷）¹⁰⁵」。この言葉が示すものは何であるのか。解釈の一つとしては、娘のことは父親がどうにでもできるということである。そして、娘は父親のものである、と公然と言ったようなものである。創るという行為の逆は破壊だ。そして反対の事象は、表裏一体であることが多い。創造主^{ビッグマリオン}である父親は、愛している反面、破壊したいという衝動も併せ持つのか。娘を創造し、破壊できる、既得権者は誰もいない、父親なのである。

フィッツジェラルドの作品に、妻を亡くした男チャーリーが、叔母夫婦に引き取られている娘オノリアと再び一緒に暮らすため、アルコール中毒を克服する物語「バビロン再訪」（1931年）がある。その中に「娘の人格がしっかりと固

¹⁰⁴ ジョーン・アッシャー編『注目すべき 125 通の手紙——その時代に生きた人々の記憶』北川玲訳（創元社、2014年、318-319頁）、319頁。

¹⁰⁵ 同、319頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

まってしまう前に自分の一部を彼女の中に注ぎこみたい¹⁰⁶』という父親の言葉がある。これは多義的に解釈できるものではないだろうか。一つ目は、娘は「ピグマリオン的な愛着の対象¹⁰⁷」である、ということだ。まさしく、ピグマリオンが、自分の望むようにガラテアを創るところである。娘は、父のマスターピースというわけである。分身である彼女の中に、自分の面影を残したい、自分の魂を注ぎ込みたいという気持ちもあるだろう。そうして彼女に、自分という人間が生きた証を残したい、という願いもある。二つ目は、文面通り以外にも、性的な意味でも解釈できる。注ぎ込むものは、自分の体液で、父の隠された近親相姦願望ということだ。

娘オノリアは「他の誰よりもお父さんのことが好きだもの。そしてお父さんは誰よりも私のことを愛している。そうでしょう、お母さんは死んじゃったし¹⁰⁸」、と言う。このセリフは、『夜はやさし』のニコルとデヴェルーを想起させる。そして、父チャーリーは自分に対して夢を抱けるほど、もはや若くない。なんとしてでも娘を自分の手元に置きたい、と思っている。この娘の言葉に対して、「君の方はいつまでもお父さんのことがいちばん好きってわけではないと思うな¹⁰⁹」と返す。将来、自分ではない他の男のものになってしまう、というほんの少しの、静かな脱力感が読み取れる。せめて娘が少女の頃には、父としたら、パパは一番だ、と言ってもらわなければならないのかもしれない。

「パパ活」では、航は娘を亡くしてそれ以来ずっと前に進むことができない。交際クラブや出会い系サイトで、パパ活をして、女の子——娘の身代わりを探している。一見、娘をパパ活で探していると言ったら、何か危ない感じ、例え

¹⁰⁶ F・スコット・フィッツジェラルド「バビロンに帰る」、『バビロンに帰る——ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック2』村上春樹訳（中央公論社、1996年、135-176頁）、152頁。

¹⁰⁷ 上野千鶴子、同、161頁。

¹⁰⁸ F・スコット・フィッツジェラルド、同、154頁。

¹⁰⁹ 同。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

ば精神障害を抱えているであるとか、アブノーマルな性的嗜好を持っているという印象を受ける。しかし、彼は知的で温厚な、ロマンスグレーの紳士としてドラマに登場する。そして、杏里と航は、他人同士から、擬似的なパパと娘になる。ついには、一線を越えた恋愛に発展する。パパと娘のはずなのに、恋人同士になってしまうのだ。実は、航に起こっていることも、ディックたち他の父親に起こっていることと、さほど変わりはない。「大人が近親相姦的に退行するときには、大人は自分のルーツにつながることによって、バッテリーに再充電をし精神的・心理的に再生することを試みている¹¹⁰」状況にある。傷ついた彼は、失った娘の存在を、新たな娘によって埋めることによって、自分の心を再生しようとしているのだ。そして航も「もう若くない¹¹¹」。疑似の娘となった、若さに溢れ、元気いっぱいの杏里に、航は見ていると楽しくなってくる。次第に、彼の心も癒され始める。

はじめは、単にパパとして娘を可愛がるという心持ちだった。その慈しみの心は、だんだんと性愛に変わっていってしまう。パパと娘、というのは危険な関係¹¹²なのか。親子の愛、と男女の愛、これらの境界線が曖昧になってしまう。なぜなら、親子の背後で、あるいはそれ以前に彼らは性別が違う者同士だからである。社会においては、会社員、教授や学生などと、それぞれの役割を演じることになる。家庭では、パパや娘という役割を演じることになる。しかし、演じているだけではなく、それらは、真に彼ら自身でもあるのだ。だから、混同してどちらがどちらであるか区別がつかなくなってしまう。

そして、娘の杏里が、同年代の男とベッドで眠っていると、嫉妬し激怒する。彼は、彼女をマンションから追い出してしまう。娘への過度な愛着で、干渉で

¹¹⁰ アンドリュー・サミュエルズ、同、53頁。

¹¹¹ 「パパ活」第5話。

¹¹² ちなみに、ドラマ内で航はラクロ（Choderlos de Laclos）の「危険な関係（原題：Les Liaisons dangereuses）」を翻訳している。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ある（最も、どこからどこまでが普通で、どこからが過度か、という境界線の設定は困難極まる）。娘に恋して肉体関係を持ちたいという衝動が湧いてくる。杏里とは、血の繋がりが無いから、衝動をセーブする必要もない。ついには、インセストに等しい事態が発生する。しかし、杏里は他人であったために、歳の差恋愛、という形に収まったというだけのことである。そして、杏里に恋をすることによって「生きるエネルギー¹¹³」を取り戻すことに成功したのである。彼は、娘との恋によって、自分を再生することができたのだ。あるいは、娘という役割・存在は媒介に過ぎず、それを通して杏里と出会い、彼女を愛することによって彼は復活した、と言うべきかもしれない。そしてそれらの境界線は曖昧で、どちらか、というよりは両方であるのだろう。

航と杏里が、まだパパと娘の時、杏里の20歳の誕生日を祝うシーンがある。亡き娘と同じ誕生日の杏里に対して、ダイヤモンドのネックレスをプレゼントするのだ。「Bon anniversaire（誕生日おめでとう）！」と言い、杏里の首にそっとネックレスをかける。この、一見何ともない場面に隠されているものがある。それは、ネックレス＝首輪で、杏里が彼の側にいるように、どこへも行かないように、航が鎖をかけているのではないだろうか。事実、パパ活のエピソードタイトルは、「私はあなたのペット」(第2話)、「淋しがりやの飼い主」(第3話)である。

桜庭一樹の『私の男¹¹⁴』(2007年)に、父である淳悟が、家の鍵のついたネックレスを、娘である9歳の花の首にかけるとあるシーンがある。そこから15年間にわたって、二人は毎晩同じ布団で寝て、花は淳悟の性的な相手をさせられることになる。長い間、父である淳悟のもとから逃げられなかった花は、24歳の時、

¹¹³ 「パパ活」第6話。

¹¹⁴ 震災孤児の花(9歳)を、遠い親戚の海上保安官である淳悟(25歳)が引き取り、彼らは義理の親子になる。しかし、実は淳悟は花の本当の父親であった。近親相姦を、父だけでなく、娘にとっても甘美に描いた物語。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

結婚を境に家を出る。その時ようやく首のネックレスから自由になるのだ（少なくとも外面的には）。ネックレスの先についているものも興味深い。淳悟の方は、家の鍵なのである。これは、より娘を離さない、どこへも行かせない、という意味合いが強い。家は衣食住の場で、家がないと生きていくこともままならない。家の鍵、は娘のライフラインでもある。そして心の帰る場所——安心できる、自分の庇護者がいる場所だ。そんな家で、毎夜虐待に似たようなことを淳悟が繰り返しているというのは、なんとも皮肉である。

対して航の方は、ダイヤモンドなのだ。ダイヤモンドは、何を意味するか。エンゲージリングにも主にこの宝石が使われる。目的は女性の魅力を引き立たせたり、華やかさを加えることである。親愛の情を込めて、大切な女性に贈る男性も多い石だ。高価なものでもあるので、気軽にはプレゼントできない。つまり、杏里と同じ年の（比較して収入がない、少ない）男性には買えない。仕事でも成功し、経済的にも余裕のある、年上の男性にしか買えないものでもある。そこから、綺麗な石であるダイヤモンドは、女性の美しさや華やかさを意味するだけではない。男性（特に金銭という観点からは、年上の男性。いわゆる、パトロン＝パパ）の権力的な側面をも暗喩する。そして、彼女がその金額に釣り合うほどの価値がある、という意味にも取れる。しかし、女性のために贈られるものでもある。そこで『私の男』の淳悟の、家の鍵よりも所有や束縛が弱まった、と解釈していいだろう。すでに、パパの時から、ひっそりと、杏里を自分のものにしてしまっていることは興味深い。

しかし、これだけで話は終わらない。この他にも、無視できない類似点が「パパ活」と『私の男』にはある。実は「パパ活」では、航が杏里に最初に渡すものは、家の鍵なのである。そのため正確に言えば、出会った時からすぐに彼女を彼のものにしてしまっている、ということになる。そして、『私の男』の淳悟は、小学生6年生（12歳）の花の誕生日プレゼントに、本物の「ダイヤのピア

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ス 115]をプレゼントする。「パパ活」で航が杏里の20歳の誕生日プレゼントに、
ダイヤのネックレスをプレゼントしたようにだ。彼らが、娘に“家の鍵”と“ダイ
アモンド”を渡すことは、何か意味があるのだろうか。解釈の一つとしては、家
の鍵を渡すことで、彼女が彼の元から簡単には逃げないようにしている。ある
いは、家という場所を提供することによって、彼女を守りたいと思う気持ちか
らなのかもしれない。そして同時に、誕生日プレゼント——彼女が生まれた日
を祝福する贈り物にダイヤモンドを選ぶことは、彼女が彼にとって、なくては
ならない大切な存在である、ということを示し示す。彼女に対する、彼の愛情
の大きさも意味しているのかもしれない。加えて、“子ども、女の子”として彼
女を見ているわけではない、という含意もあるだろう。彼にとって彼女が（色々
な意味で）とても大事な“女性”であるということを示唆するものなのかもしれ
ない。

ここで、ただ娘を大切にしようという航と、実際に花が9歳の時から自分の
性行為の相手をさせる淳悟は、この上なく違うかもしれない。しかし、その背
後にあるものは、共通した、娘を自分の近くに置いておきたい、という強い思
いなのではないか。この思いは、嫉妬深いとも言え、ただ愛しているだけとも
解釈できる。ロマンスグレーの静かな紳士としてドラマに現れる航に、このよ
うな熱情があることは少々驚きでもあるが。しかし、だからこそ彼は、パパ活
（という危ない感じの活動）で娘を探しており、その娘^このパパになろうとして
いたのだ。そして航だけではない、このような感情は誰しものが持ちうるものな
のだろう。精神分析のパイオニアの一人であるハロルド・サールズ¹¹⁶は、彼の

115 桜庭一樹、同、286頁。

116 1918年～2015年。精神分析家。統合失調症治療の権威である。また“逆転移”現象の先駆的研究を行なった。主な著書に『ノンヒューマン環境論』（1960年）、『逆転移』（1979年）など。デイヴィッド・セジウィック『ユングとサールズ』織田尚生・老松克博監訳（金剛出版、2009年）、20-22頁と256頁を参考。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
娘が2～3歳の頃、彼女に恋にも似た感情を抱いたと著書で回想している。

彼女が私[父親(サールズのこと)]に対して見せる誘惑的な態度に対して、非常にロマンチックで熱烈な、無数の性愛的夢想と（理性とは反した）感情を娘に抱いたことがある。（中略）いつも、私は同時に何かしら不安な気持ちになるのだった。彼女[娘]がこの上なく自信ありげな艶かしい女で、私に迫ってきた時には。私は彼女の虜になってしまっていた¹¹⁷。

罪との境目は、紙一重なのかもしれない。『夜はやさし』の登場人物の父親たち、デヴェルー・ウォーレンもディック・ダイヴァーもだ。そしてアメリカを代表する小説家でもあるが、一人娘の父親でもあった、フィッツジェラルドも同様である。

なぜこのようなことが起きるのか。権力者であるはずの父に何が起きているのか。家父長制の家族構成の中で、最も立場が強いのは父で、最も立場が弱いのは娘である（「娘は子どもとして絶対的な弱者、息子よりもさらに弱者¹¹⁸」だと上野千鶴子は言う）。その立場の強い父が、どうして、ちっぽけな存在である娘に、わざわざ手をかける必要があるのだろう。航は娘にこだわり、デヴェルーは罪を犯してしまう。そして、ディックといい、どうも彼らは、心の一息つける瞬間を求めているらしい。そして往々にして、その先は娘なのである。どうして、癒しあるいは救いの先が、娘に向くのか。

かれはあたしのまえでは、**工業社長という社会的存在はむろんのこと、

¹¹⁷ SEARLES Harold, «Oedipal love in the transference», *Collected Papers on Schizophrenia and Related Subjects*, Hogarth Press, 1968[1959], p.296 から亀谷訳。

¹¹⁸ 上野千鶴子、同、161頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
父親という威厳の盾も棄てて裸の精神そのものでした。たとえば、子どものなかにまぎれこんで子どもとおなじ顔で遊んでいる大人のように¹¹⁹。

父親がときにはインセスト、あるいはインセストぎりぎりのところで娘との濃密な絆を結びたがるのは、父たる權威に乗っかってであるとともに、自己の存在理由についてのこのような空虚さ〔一家の専制君主たる父親は、その反面、足元の意外な脆弱さにもさらされているのである〕、希薄さの意識に根付く部分も無視できない¹²⁰（中略）。

なぜなら、父もそれほど強くないということである。そして「自分を拒まない唯一の人間は、娘だけ¹²¹」なのだ。責任を求められる仕事、社会的な地位、弱みを見せられない……。彼は、“大人の顔”を絶やすことができないのである。その強い顔の半面、どうしようもない弱さや脆さも抱えている。それが人間というものでもある。そして魂の叫びでもある。そんな行き場のない、発散させることのできない思いを抱えているパパにとって、弱くて幼い、自分の手のひらで転がせる娘とは格好の癒しの種なのかもしれない。

無論、他の方法でそれらの思いに対処するのが、“大人”というものでもあるだろうが。では、これは娘にとってはどうか。そんな「裸の精神」で「子どものなかにまぎれこんで子どもとおなじ顔で遊んでいる大人」をどう思うのか。彼に向き合うのか。呆れるか、軽蔑するか、それともパパと一緒に遊ぶか。娘は、様々な選択ができる。その一つは、パパと一緒に遊ぶこと、すなわち父の

¹¹⁹ 倉橋由美子、同、273頁。

¹²⁰ 原田武、同、162-163頁。

¹²¹ 石川義之、同、12頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

「誘惑者¹²²」になることだ。「息子が父とライバル関係に入る¹²³」のに対して、娘は父とライバルになる必要がない。むしろパパに自分を気に入ってもらうようにした方が、自分の要求も聞いてもらえる。戦わずして勝つ、というように得である。つまり、娘はパパの前で従順な態度に出る。「父の命令に従うことで彼を喜ばせ、彼を誘惑しようと思っている¹²⁴」。だから、彼女はパパに可愛くとり入るし、それによって誘惑者になる。そして自分の誘惑に、パパが屈服したその暁には、娘の勝利である。最も立場の弱いはずの娘が、強いパパを手なづけ、権力を彼女のものにすることができるのだ。屈服したパパは、娘の言うことを聞いてくれるし、自分をこれ以上ないほど可愛がってもくれる。パパが癒されているだけではない。娘にとっても、非常に甘美な話である。

「『父の娘』を共演してあげることをつうじて、父を侮蔑し、嘲笑し、権力関係を転覆することも、場合によってはできないわけではない¹²⁵」と上野千鶴子は言う。「父の娘」とは、「父親から愛されて高く評価され、そのお返しに父親を愛し、信頼するこれらの女性¹²⁶」のことを指す。彼女は「自分自身の内に自分の値打ちを感じられなくなる¹²⁷」という。「輝かしい父の栄光のもとに生れ、その存在にあやかろうとして、ともすればみずからの女性性を蔑ろにしかねない少女¹²⁸」とも矢川澄子は言う。また、父の娘とは「父の価値観に従って行動

¹²² 上野千鶴子、同、159、161、163、167 頁などに見られるフレーズ。以下は参考に。「父が誘惑者になりえる」という表現もある。実は、娘が父親を誘惑するだけでなく、父親も娘を誘惑する。そして父権制の基盤は父が生真面目であることで、父は自分の娘に対する欲望から自分を守らなければならない。彼は誘惑したりされたりすることを拒むという掟を定める。この父の掟に従うことで、娘は彼を誘惑するのである。ジェーン・ギャロップ『娘の誘惑——フェミニズムと精神分析』渡部桃子訳（勁草書房、2000年）、157-158と166-168頁を参考。

¹²³ 上野千鶴子、同、161頁。

¹²⁴ ジェーン・ギャロップ、同、158頁。

¹²⁵ 上野千鶴子、同、163頁。

¹²⁶ デマリス・S・ウェーア『ユングとフェミニズム——解放の元型』村本詔司・中村このゆ訳（ミネルヴァ書房、2002年）、137頁。

¹²⁷ 同。

¹²⁸ 矢川澄子『「父の娘」たち——森茉莉とアナイス・ニン』（平凡社、2006年）、149頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
している¹²⁹」「ファザコン娘¹³⁰」だと田中貴子は言い換えている。

ところで、『夜はやさし』のウォーレン親子のように、他者へ向くはずの愛が
近い関係へ向いてしまうことは危険なのだろうか。前述のハロルド・サールズは、自身の娘に恋のような感情を抱いたことに関してこう結論づけている。

これらの（性愛が絡んでいるようで少し不安になるような）瞬間は、私自身
[サールズ]にとっても（ある意味）嬉しいことだが、彼女[娘]のパーソナリティの発達の一助となるものであろう。もしも彼女の父親——娘をよく知り、長い間一緒にいる、血の繋がりのある人物——の愛情を勝ち得ることができなければ、この先一体どうやって、彼女は女性として自信を持つことなどできるだろう？¹³¹

子どもは親からの愛情をもらわなければ、成長していけない生き物なのであろう。フロイトの説明では、発達段階において、娘は母親から父親へ乗り換える時期が訪れる。男に生まれられなかった娘は、ペニスの代償に他者からの愛情を望むようになる。それは「いつまでも私を愛してくださいとか、お父さんから子供をもらいたいという形をとる¹³²」。それに対して父親が応えないために、「女の子は、愛されなくなるんじゃないかという恐れを他の人に向けてゆくより仕方がない¹³³」状態となる。そうして「父親との恋愛は自然消滅¹³⁴」になる。言い換えれば「立ち消えになるから、父と娘はいつでも相姦する準備はで

¹²⁹ 田中貴子、同、34頁。

¹³⁰ 同、20、34頁などに見られるフレーズ。

¹³¹ SEARLES、同、296頁から亀谷訳。

¹³² 佐々木孝次・伊丹十三『快の打ち出の小槌——日本人の精神分析講義』（朝日出版社、1980年）、221頁。

¹³³ 同、225頁。

¹³⁴ 同。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
きてるわけ¹³⁵」なのだ。父親と娘だと、性別が違うことに加え、彼らを切っ
くれるものが明確には存在しないということが問題なのである。加えて、父親
は母親のように子どもと緊密な関係になかったので、近親相姦的衝動のコント
ロールに不安がある¹³⁶。よって、インセストのような一線を越えた関係に発展
してしまう危険が大きいのだ。

さらに、パパというのは権力者であるだけではない。それ以上である。『夜は
やさし』では、娘を示唆するローズマリーに、ディックは「神にも似た不動の
存在（下線強調は亀谷）¹³⁷」として映っている。父は、「創った者」——^{ビッグマリオン}創造主であ
る。すなわち「創られた者」である娘にとって、神同然なのだ。そして、親子
というのは、子どもが成長していく上で、離れていく。子どもは自分で人生を
切り拓くようになり、自ら選択して、生きるようになる。それまで、一緒にい
たパパと娘は、別々の人生を歩むようになる。大人の女性になることと、少女
からの脱却は同義である。娘が、成長する上で避けては通れないこと——大人
の女性になるためには、少女から脱却しなければならない。彼女は、いつまで
も少女のままではいられないと気づく。そして少女からの脱却は、同時に父と
いう存在からの脱却でもある。なぜなら、自分をそれまで守ってくれていた庇
護者がいる、かよわい存在から、彼女自身の足で人生を歩き出さなければなら
ないからだ。娘が、少女から大人へと人生をステップアップさせられるかどう
かは、パパから離れられるかどうか、にかかっているのかもしれない。

「パパ活」は、杏里という一人の少女が、大人の女性へ成長するプロセスを
描いた作品でもある。“少女”である杏里からすれば、東京という大都市は憧れ
で、街には大人や他者が大勢いる。街でネットに触れ、ネカフェ¹³⁸を利用する。

¹³⁵ 同、226頁。

¹³⁶ アンドリュー・サミュエルズ、同、55頁を参考。

¹³⁷ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』、同、153頁。

¹³⁸ ネットカフェの意。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
大学では、母や父に聞いてもらえないことを、同じ少女である友達と話す。家（内）から出て、大学（中間地点）を經由して、街（外の世界）に少女の杏里が出て行く。そして彼女は航と出会う。家から出て、親の支配から抜け出し、自分の人生を生きるようになる。一方で、大人になった彼女が選んだ相手は、25歳年上の彼——パパの航なのである。彼女は、パパと娘、から抜け出し切れないのだ。

倉橋由美子の作品に『聖少女』（1965年）がある。交通事故にあって母親を亡くし、自身も重傷を負った22歳の未紀が主人公である。同世代の恋人が彼女を見舞いに行き、彼女が事故に遭って記憶を無くす以前に書いたノートを見せる。そのノートには、40代前半の素敵^{デンティスト}な歯科医で未紀が「パパ」と呼ぶ恋人との、赤裸々な夜の話が書かれていた。しかし、実際は、そのような人物は存在せず、未紀と性的な関係を持っていたのは、彼女がパパと呼ぶ、実の父親だったのである。ロマンチックなデンティストとの恋人関係など存在せず、18歳から22歳まで、未紀のパパが癌で死ぬまで、性的な虐待を受けていたのだ¹³⁹。しかし「あたしはもうあれがあたしのほんとの父であったということが実感できなくなりました。それがだれであろうと、ひとりの男を愛したということだけが残ります¹⁴⁰」と彼女は書く。彼女はパパを愛していたのだ。そうすると、自発的な加担者でもあるのだろうか。ノート（作り話）を書いたのは「にせの恋人パパを愛するために¹⁴¹」、「不可能な恋人であったパパに対するあたし[未紀]の不可能な愛を聖化しようとした¹⁴²」ためだったという。

未紀がパパとこのような行為をしたのは、なぜか。少女は、自分も現実の母

¹³⁹ 挿入を伴わない性行為は18歳よりも前から生じていた可能性がある。「いつからだったか……あのときは、一滴も血をみないですんだのに」。倉橋由美子、同、13頁。

¹⁴⁰ 倉橋由美子、同、275頁。

¹⁴¹ 同、269頁。

¹⁴² 同、269頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
——優しく善良だが、退屈で下降の一途をゆっくりたどっていく、力のない女性と同じになることを恐れはじめる。反対に、社会的に成功し、威厳に満ちたパパは「手近にあるモデルにして、容易に尊敬とあこがれの対象になる¹⁴³」。そうして、神に等しい絶対的な力を持った彼——パパに惹かれるようになる。その権力を持ったパパと「特別な関係¹⁴⁴」、すなわち性交渉を持つことで「弱い女性よりも優位な男性の仲間に入れてもらおうとする¹⁴⁵」。神であるパパと一緒に、自身も人間という俗物的な生き物から脱却し、神になろうとしたため、だということである¹⁴⁶。パパが亡くなった後、彼女は同世代の恋人と結婚する。パパという存在から脱却し、「生身の母の存在と、やがては生身の女となっていく己のつまらない運命¹⁴⁷」を受け入れる。彼女は、少女から、大人の女性になることを受容するのである。

『私の男』の淳悟と花もそうである。花が少女の頃には、父である淳悟の欲求の相手をし、彼と同一化したい（「おとうさんと重なって自分もおとうさんになってしまいたい¹⁴⁸」）と思っていた。しかし、花が成長し24歳にもなると、彼の相手をしなくなる。彼女の眼は、外の世界に向いていくのだ。

森茉莉の『甘い蜜の部屋』（1975年）では、妻を亡くした父と、母親を亡くした娘が登場する。彼は娘を恋人のように溺愛する。そんな父親に、娘は滋養の乳——愛情を求める。彼らはまさに「『母の乳房にまといつくようにして』父に甘える娘と、娘に『恋としか言いようがない』感情を抱く父¹⁴⁹」である。そして父は、自分は娘なしでは「生きる意味がない¹⁵⁰」と思っている。彼らは（父

¹⁴³ 原田武、同、165頁。

¹⁴⁴ 原田武、同、160頁。

¹⁴⁵ 原田武、同、160-161頁。

¹⁴⁶ 桜庭一樹の解説（倉橋由美子、同、292-298頁）、294-295頁を参考。

¹⁴⁷ 同、295頁。

¹⁴⁸ 桜庭一樹、同、187頁。

¹⁴⁹ 原田武、同、167頁。

¹⁵⁰ 森茉莉『甘い蜜の部屋』（新潮社、1975年）、14頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）の、娘の盲愛ぶりについて）少々、あるいはかなり特殊かもしれないが、普通の親子である。近親相姦というタブーは犯されていない。父親にべったりである娘は、いったん結婚してお嫁に行くが、自由奔放な彼女は夫の手に負えなくなる。彼女の愛を得られない夫はだんだん精神を病み、ついには自殺してしまう。父親は、彼に対して申し訳ないという気持ちを抱くが、同時に娘が自らの元へ戻ってくることをひっそりと喜ぶ。かくして、彼らは再び「甘い蜜の部屋」——父と娘の濃密な愛情の世界、へと戻る。

そして大きな着眼点は、これら父と娘の危ない関係、「少女小説¹⁵¹」を書いたのは全て女性なのだ。男性にとっては、心で思っている、書くことは少々敷居が高いのかもしれない。パパと娘、という禁忌は、考えるだけで倫理観の咎めがあるのかもしれない。性的な被害を受け、搾取される側——女性だから、書ける内容でもあるのだろう。あるいは、少女のおとぎ話、とでも言うのだろうか。女性は、当然だが、つねに誰かの娘でもある。「父親とは女の子にとって最初の異性である¹⁵²」という。彼女から見たら、パパは特別な存在なのだろう。パパ以上に彼女を愛してくれる存在はないかもしれないし、厳格で社会で成功しているパパというのは娘にとって、憧れの的である。なぜ、少女がこんなにもパパになつくかと言えば、それは、パパが彼女を愛してくれるからだ。パパからの愛情によって、少女の“わがまま”な自己愛は満たされる。少女という純真な、広い世界を知らないものにとっては、パパは神であるのだ。

3章では、『夜はやさし』と「パパ活」に見られるインセスト（近親相姦）について、他作品を交えて考察してきた。『夜はやさし』では、実際に、ニコルと彼女の父親との間にインセストが起こる。そして、娘トプシーに対する、ディッ

¹⁵¹ 桜庭一樹の解説（倉橋由美子、同、292-298頁）、292、298頁。父以外にも、兄など近い人物に少女が恋をすることを描いた小説のことである。少女の、大人の女性へ成長することへの拒否、が描写されてもいる。

¹⁵² 矢川澄子、同、112頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

クの近親相姦的衝動を秘めた言動もあった。「パパ活」においても、航と杏里の間に、インセストに等しい事態が発生するが、彼らは血が繋がっていなかったため、歳の差恋愛という形に落ち着いた。パパが娘を性的な欲求のはげ口とするのは、一つには若い娘は魅惑の対象となり、彼女を女性として見るようになるためである。そして自身が抱える弱さや脆さから、彼女に癒しを求めるからだ。娘にとって、パパは娘の創造主——“神”である。娘がパパの欲求に応じるのは、“神”であるパパと特別な関係を持つことで、自身もパパと一緒に“神”になろうとする。すなわち、弱い、時には搾取される女性から、社会において優位である男性の仲間入りをしたい、という思いがある。また、少女から大人の女性へと成長することの拒否感からでもある。

4. 信頼関係の崩壊と孤独

そして、インセストの背後にあるものは何であるのだろうか。なぜ、このような社会的には戸惑いを隠せないようなことが起こるのか。一つの答えとして、それは「孤独」である。これは『夜はやさし』と「パパ活」に一貫して共通するものだ（その他の、インセストを扱った作品にも根深い孤独が観察できる）。「人間関係がドライに機能的になり、容易に人のぬくもりを感じられないなかでは、性的な絆でしか親密さが保証されないかにみえる¹⁵³」。そして、孤独とは一体それ自体何であるか、という問いも浮上する。孤独には、様々な孤独があり、一人一人その種類が違うという多種多様なものでもあるのだ。

『夜はやさし』について見る。恵まれた容姿や頭脳を持ち、何の欠損もないかのように見える医者ディックが主人公だ。だが、彼は妻のニコルと絶えず気の抜けない日々を送っており、そこには救いがない。人生をどうすることもできない、どうにもならないという焦燥と、誰ともこの気持ちを分かち合えないという孤独がある。「ニコルと一緒にいても孤独を感じることに彼にはよくあった¹⁵⁴」。最も近い存在である妻とも本当には心を通わせられない。孤独は、彼自身のものにしかならないのだ。そして日々が過ぎていってしまう。ただ下降の一途をたどるのみである。

ニコルの父親、デヴェルー・ウォーレンは、30代という若さで妻を亡くす。ニコルも11歳という幼さで、母親の愛情が必要な時期に、母親を亡くす。妻を亡くした父親と、母親を亡くした娘には、彼らにだけ共感しあえる孤独が存在している。二人はそんな孤独を分かち合い、彼らだけの世界で生きるようになる。

¹⁵³ 原田武、同、17頁。

¹⁵⁴ F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』、同、276頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

る。母親という、父と娘の度が過ぎた仲の良さを食い止める防波堤が存在しないので、結局恋人のように親密になる。娘は、父親のことが大好きなのと、淋しさから毎朝父親のベッドにもぐりこむようになる。父は、お気に入りの彼女を舐めるように可愛がり、小さな恋人にする。孤独からか、ついにはインセストが発生する。いくらお互いのことが大好きだから、といってもそこには明確な、超えてはならない一線は確かに存在するのだろう。社会通念上、インセストという罪は、殺人、共食いと同様に重罪なのだから。ニコルの人生はそれ以降変わる。娘の幸せを誰よりも願うはずの父親は、最愛の娘を自分の手で傷つけてしまうのだ。

「パパ活」ではどうか。杏里は、幼い頃に父親が家を出て再婚する。父親の愛情を知らない。母親も、若い恋人を家に住ませ、杏里の居場所がなくなってしまう。そして彼女は、母親に、家から追い出されてしまうのだ。最も愛情をもらえるはずの、親から愛情をもらえない。友達が多いと思っていたはずなのに、家を追い出された彼女を泊めてくれる友達もいない。自分ではそこそこ可愛いと思っていたのに、あっさり彼氏にも浮気されてしまう。ここには、現代社会で誰しもが直面する孤独がある。自尊心は傷つき、周囲に幻滅する。何より自分自身が嫌になる。「明日になればまた変わるかも¹⁵⁵」知れないが、物事はうまくいかず気持ちは沈む。そして、自分が社会の一部になれていないような、社会から取り残されていくような孤独がある。

航は、最愛の娘を10年前に亡くし、以来妻ともギクシャクした関係が続いている。結婚生活に逃げ場を求め、「隠れ家¹⁵⁶」——自分だけで過ごせるマンションを借りる。胸の内を誰にも明かすことができず、現実の世界に本当には目を向けられない。時間が経っても、一向に、前に進めない。そして娘という期待

¹⁵⁵ 「パパ活」第8話。

¹⁵⁶ 同、第1話。第1話をはじめとし、ドラマ内では多く見られる。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
を捨てることも忘れることもできない。実は、航は、亡くなった娘とは本当は
血の繋がりはなかった¹⁵⁷。そして、妻からそのことを知らされることはなかつ
たのである。ディック同様に、航も妻と本当に心を通わすことなどなかつたの
かもしれない。けれども「素晴らしい日々だった。娘との最高の日々が¹⁵⁸」と
彼は言う。そして、パパ活——交際クラブや出会い系サイトで「またもしかし
たら、そうした運命にもほど近い出会い¹⁵⁹」があるかもしれない、と期待する。
亡くなった娘と同じ歳の女の子を、同じ誕生日で探す。気性が穏やかな彼と同
じように、そこには静かな、そして深い孤独がある。そこから脱出しようと、
静かにもがく姿も印象的だ。

孤独から何が生まれるか。『夜はやさし』のディックのようにさらなる孤独が
生まれることもある。「体も心も一人きりでいることは淋しさを生み、淋しさは
さらなる淋しさを生んで際限がない¹⁶⁰」。淋しさが募るだけではない、彼はただ
ただ疲れてくる。もう、自分の目の前にある状況を直視したくはない、しなけ
ればならない、というどうしようもない気持ちで毎日を過ごすようになる。そ
して、淋しい、孤独だから、とって人との繋がりで心が癒されることはもは
やないのである。「ディックはこんなふうに喋っていたくはなかつた。——一人
になりたかつた。一人になれば、仕事と未来についての思いが、愛と現在につ
いての思いを押しつけてくれるだろうから¹⁶¹」。自分がどう思っているか、を話
すことはもはやしたくない。そうしても彼に救いなどないからである。あるい
は、相手の機嫌をとって、楽しく見せかけて話すことも、もう苦痛なのである。
疲れて、どうしようもないから、一人になりたいと思うのだ。そうしてさらに

¹⁵⁷ 彼の妻と、彼の親友の子どもであった。

¹⁵⁸ 「パパ活」第7話。

¹⁵⁹ 同、第7話。

¹⁶⁰ F・スコット・フィッツジェラルド、同、297頁。

¹⁶¹ 同、249頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
孤独は深くなっていってしまうのである。これは「パパ活」の航にも言えることである。「表面上それほど変わらず¹⁶²」、一方で心は深く重く沈んでくる。

あるいは依存が生まれることもある。孤独な人間たちから、「依存」というテーマも、切り離して考えることはできないだろう。孤独は、その分、支えや温かみを渴望するものであるから。そしてそれが、他者への依存という形を取ることも、しばしばある。『夜はやさし』では、ディックだけではない、ニコルの孤独ぶりにも触れられている。結婚前、パーティーの間に姿を消したニコルを探している姉に向かって、「一人になりたいだけでしょーー一人ぼっちで生きていると、孤独に慣れてしまうものです¹⁶³」とディックが言う。結婚後は彼がいながらも「ニコルは淋しい人生を生きていた¹⁶⁴」のである。二人は、孤独な者同士なのだ。他方で、ニコルとディックはそれぞれ別個の人間であるはずなのに、それが曖昧になっていく。ディックはニコルで、ニコルはディックなのだ。「ディックとニコルは、似合いのものが相互に補完し合うという関係ではなく、同等なものとして一つになってしまった¹⁶⁵」。二人で暮らす時間が長くなっていくと、それは顕著になる。

ディックがニコルのパパの転移対象ならば、ディックとニコルが相互依存していることは、パパと娘、の依存関係とも解せないだろうか。ニコルを筆頭に、ローズマリー、『私の男』の花、『聖少女』の未紀、そして「パパ活」の杏里も、彼女たちは父の支配や影から逃れられない父の娘なのである。危険だと分かっているが、父という存在から、自分を解放することができないのだ。

しかし、ニコルには契機がやってくる。弱っていく一方のディックとは逆に、

¹⁶² 「パパ活」第4話。

¹⁶³ F・スコット・フィッツジェラルド、同、225頁。

¹⁶⁴ 同、265頁。

¹⁶⁵ 同、280頁。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

彼女は強くなっていく。「わたし、もうほとんど完成してるじゃない¹⁶⁶」、「もう一人で立っているようなものだわ、彼 [ディック] なしで¹⁶⁷」、「この先、一生 <お父さん> っていう言葉にびくびくし続けるなんて、ごめんだわ¹⁶⁸」。物語が終盤に近づくにつれ、彼女はこう思うようになる。そして、ディックから離れる道を取る。そしてそれは、彼女の父親から、本当に、離れることができたことを示唆もする。彼女は、父のインセストを克服するのである。誰か父親に似た存在に頼ろうとする、依存心もだ。

「わたし自身に似た父、わたし自身に似た娘、というわけなのだ。質問に答えてくれる自分の分身¹⁶⁹」、「そうか、われわれは大して疎遠でも、孤独でもないんだな [父の言葉]。わたしたちは二人ですもの¹⁷⁰」、と父に恋したアナイス・ニンは日記に書く。『私の男』の花と淳悟も、強い依存関係にある。成長しても、花は、淳悟の陰から脱却できない。離れたい、逃げたいと思う反面、彼女は、淳悟の元を離れたくない、離れられないと強く思ってしまう。淳悟も、花なしでは生きていくことはできそうもない。「どうしたら、いいんだろうな。いまさら、離れて¹⁷¹」と彼は呟く。そして、結婚して花が家を出ると淳悟は行方をくりますのである。

創った者——父と、創られた者——娘、二人で一つの彼らは、離れられるのか。「ひとりの人間としての生存能力は、近親相姦という主題を解決することにかかっている¹⁷²」とすると、彼らは別個の独立した者同士にならなければなら

¹⁶⁶ F・スコット・フィッツジェラルド、同、420頁。

¹⁶⁷ 同。

¹⁶⁸ 同、422頁。

¹⁶⁹ アナイス・ニン『アナイスの日記——ヘンリー・ミラーとパリで』原真佐子訳（河出書房、1974年）、223頁。

¹⁷⁰ 同。

¹⁷¹ 桜庭一樹、同、22頁。

¹⁷² アンドリュー・サミュエルズ、同、55頁。なお、このくだりは、SEARLES、同、303頁を参考・引用したものである。以下に原典を和訳したものを、参考として載せる。「近親相姦問題を抱えたまま大人になった神経症・精神病の患者は、彼らの未解決のエディプス・コンプレックスを解決しなけれ

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
ない。「娘は父親との間に距離を置きながらも父親と信頼関係を築き心理的に分離して自立していく¹⁷³」とも水本深喜は述べる。しかし、こうあってはならない、離れなければならない、そう思っても彼から逃れられない時もあるのだ。なぜだろう。一つの答えとしては、彼の元にいれば、安心だからだ。庇護者を求めている女性にとっては、女性を蔑みながらも男らしく、自分を守ってくれるピグマリオンほど頼もしいものはない。そして人間、頭では分かっている、そう強くは居られないようである。

また、『私の男』では、あるエピソードがある。花が少女の頃、インセストが周囲にばれそうになる。その時、彼らは、ともに殺人を犯してしまう。近親相姦に加えて、殺人という大罪を犯してしまった罪人たちなのだ。他人がわからない、入り込む余地のない、彼らだけの世界、生活が出来上がる。ここでは、父と娘、二人は依存関係で、共犯関係でもある。

「パパ活」では、「**Je ne peux pas vivre sans toi**（あなた（君）がいないと生きていけない）¹⁷⁴」、と杏里と航が互いに言う場面が最後にある。これは、依存¹⁷⁵ではないだろうか。究極的に二人の世界で生きる、ということでもある。しかし、それだけではない。彼らは、自立した一人の大人たち、でもある。彼らは相互補完の関係なのだ。これを依存と言って良いものか。「あなた（君）がいないと生きていけない」というのは、あなた（君）に出会う前までは、これまで一人で大丈夫だと思ってきた。しかし、自分はそれほど大丈夫ではなかった。一人の無力な弱い人間に過ぎなかったということに気づいた、またそうなってし

ばならない」（亀谷訳）。

¹⁷³ 水本深喜「青年期後期の子の親との関係：一精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差一」、『教育心理学研究』（66巻2号、2018年）、124頁。

¹⁷⁴ 「パパ活」第8話。

¹⁷⁵ 依存をテーマにした作品について。野島伸司脚本「高校教師」（TBS、1993年、2003年）、最近では、同氏脚本「雨が降ると君は優しい」（HJホールディングス、2017年）など。野島伸司作品の命題とも言える。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
まった。お互いの存在を知った今、あなた（君）がいなくなるということは考
えられない、失えない、といった意味合いなのだ。

杏里と航——彼らは、依存なのか、それとも究極の愛なのか。あるいは両方
か、判断は難しい。究極的にふたりの世界に閉じこもる依存とも解釈できるで
あろうし、無力な人間同士支え合って生きる、ということでもある。依存と支
え——依存から支えを必要とし、支えから依存が生まれる。こう解釈もできる
が、実際は、単に無機質に片付けることはできない。人間の抱える問題の深淵
であるからだ。それは、ロジックで指し示すことのできない何かでもある。

『夜はやさし』では、苦しみの中にいる主人公ディックが、妻と別れ、故郷ア
メリカへと戻り、町医者となってひっそりと雲隠れするように消息を絶つ。最
愛の子供達ともそれ以降会うことはない。人生を再び上昇させられないまま、
少しずつ、しかし明確に下降するのみだ。孤独をついには誰とも分かち合うこ
とはできず、そして緩和することもできないまま、一生を終えていくことにな
る¹⁷⁶。そしてそれは、「絶望して、孤独の極限からぼくは旅に出たのだ。つまり、
マドモアゼル・デルプラングと二人きりという孤独。また、たいていはろくに
面識もない人間を相手に半時間だけ自尊心を取り戻す、リッツ・バーでの孤独¹⁷⁷」
というように、作者のフィッツジェラルドの抱えた孤独でもあって、彼自
身が苦しんだ姿でもあった。

対する「パパ活」では、どうか。杏里が、付き合っていた大学の先輩は、彼
女の友達と二股をかけていた。ないがしろにされている、と彼女は感じ、傷つ

¹⁷⁶ 作中には、ディックの死について明確な表現はない。しかし、タイトルに注目した以下の論考を
参考とした。「彼は最後には『無名状態にもぐる』ことによりやっと『逃避』を発見したように、この
『疲れ』を癒す『逃避』の場所は、究極的な『夜』の世界、すなわちそれは『死の世界』であったの
かもしれない。『夜はやさし』の『夜』の『やさしさ』は、結局のところ、苛酷な『昼』の世界のすべ
てを闇に覆い隠し、安らかな眠りを提供する死への憧憬を意味している」。伊豆大和『フィッツジェラ
ルドの長編小説』（旺史社、1988年）、207頁。

¹⁷⁷ F・スコット・フィッツジェラルド、同、515頁。1930年夏、ゼルダへの手紙に書かれたもの。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

く。傷ついた心は、どこへ行くのだろう。心は、安心できる関係を求めるはずだ。折しも、航が彼女の前に現れる——パパ活を通して。彼女にとって、はじめその人は、「妄想の娘と疑似恋愛¹⁷⁸」をしている、素敵だが「ヤバイ¹⁷⁹」おじさんである。しかし、部屋を借りていることもあり、自らも、パパである航のために何かをしてあげたいと思うようになる。それまでずっと、娘のことを「心配するのは当たり前¹⁸⁰」のパパがいなかった杏里は、自分を本気で気にかけて心配する契約パパをもつ。口論をしてひどいことを言っても、心配して、杏里を夜中にタクシーで迎えに来てくれる¹⁸¹。

ドラマ内では、杏里が航に対して物を言い、航が「そう」と答えるシーンがとても多い。よくあるシーンのようだが、実際、現実でもこのように、本当に自分の話を聞いて、「そう」と言ってくれる人はどのくらい、いるか。自分の話していることに、じっくりと耳を傾けてくれて、相槌を打ってくれる。それは、うわべではない、心からの気遣いである。この何気無い、そして短い一言が、自分を受け入れてくれている、と思う。航が、遠慮なくズケズケと自分に意見してくる杏里が新鮮だったように、杏里も、今までになかった感覚を味わう。

愛情を「疑似体験¹⁸²」して、航が「ほんとのパパ¹⁸³」に思えてくる。そうして、パパと娘の「疑似恋愛¹⁸⁴」をしていることに気づく。そしてはや、それはパパへの疑似の愛なのか。本当に、娘からパパへの尊敬や愛情でもあるし、その一方で、男女の愛でもある。航が杏里と出会って、心を回復していっただけではない。同じように、杏里も、航と出会い心が安らいでいくのである。安

178 「パパ活」第4話。

179 同、第5話。ドラマには頻出する語句である。

180 同、第5話。

181 同、第4・5話。

182 同、第5話。

183 同。

184 同。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
心できる関係を手に入れる。それまでずっと不安定な心を抱えてきた人間は、そのこと自体に気付かなくなっていくものだ。久しぶりに、心の底からほっと息をつく。杏里の場合、それは血の繋がっていない他人のはずの“契約”パパの航で、航は“疑似”の娘の杏里だったのである。

航は「この年で、僕は恋をしたことがない。娘以外に（中略）まともな恋は初めてだ（中略）そして最後だ¹⁸⁵」と杏里に言う。これは、彼の娘への恋を公然に告白した場面である（無論、彼が言うまでもなく杏里や視聴者は知っている）。フィッツジェラルドの描いた父親たちも含め、パパというものは、娘に恋をする生き物なのか。杏里のことは、最終的には一人の女性として愛することになるわけだが、入り口はパパと娘、である。娘に恋したことと同義でもある。それが、血縁がなかったため「まともな恋」が成立したわけだ。つまり、杏里という、より女性に傾いている、もう一人の娘に恋をしたことでもある。そしてその彼女への恋は、人生最後の恋だという。最後の恋、この言葉が意味するものはなんだろう。彼——パパたちはもう若くはない。人生の折り返し地点を過ぎてしまっていることも多い。この先、彼らの人生を彩るようなことは一体どのくらいあるのだろうか。若い女性、それは彼らにとっては「娘」を連想させる生き物でもある。その対象への最後の恋というのは、迫りくる人生の終焉への、かすかな抗いであり、思い出や記念品であるのかもしれない。人生に花を添えるということでもあるのだろう。

「パパ活」では、『夜はやさし』のエンディングとは違う。それぞれの孤独を抱えた杏里と航が、時にはぶつかったりしながらも、お互いの存在を支えとして、温かい人間関係を獲得する。うわべだけではない真の関係を構築することに成功する。心から、相手に気にかけてもらい、また自分も相手のために何か

¹⁸⁵ 同、第8話。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
をしたい、と思える人同士をもち合うことができる。孤独からの脱出である。
彼らは自分の居場所を見つけることができたのだ。そして、その方法が、パパ
活——パパと娘、だったのである。

以上を総括すると、『夜はやさし』のニコルとデヴェルーから、またディック
とトブシーから分かるように、パパと娘は、親しい人間関係の中でも最たる危
険を孕んだ関係だ。その後の娘の人生を変えかねないし、パパは生涯自分のし
たことに恐れおののくことになる。どちらも罪人だという意識から逃れられな
い。一方の「パパ活」からは、パパと娘は、お互いに最も思い合える存在であ
るという事実も浮かび上がる。航と杏里は、他人同士であったが為に、インセ
ストという罪を背負うことなく、「パパと娘、妄想の疑似恋愛¹⁸⁶」に落ちる。そ
して、その結果、二人は自分の大切な人を見つけ、人生を取り戻すことに成功
するのだ。

野島伸司は、パパ活について、「援助交際を綺麗事で包んだとも言われていま
すが、現代世相の一つ¹⁸⁷」だと言う。見たくないもの、聞きたくないこと、か
らは顔を背ける。現実の問題に腰を据えて取り組もうとしない、すぐ逃げる。
これらは若者だけの問題ではない。今の日本全体の風潮とも言えるものかもし
れない。しかしコインには表と裏があるように、現実にも表と裏はある。出会
い系サイト、マッチングアプリなどインターネットを通じたやり取りは、現代
社会の特徴だ。杏里がこれまで、言えなかった思い、受け止めてほしいと思っ
た心、を受け止めてくれたのは、見ず知らずの他人であった航なのである。ネッ
ト社会の明暗を浮かび上がらせてもいる。

「金銭、発生してる契約恋愛¹⁸⁸」——「スキャンダラス¹⁸⁹」でマイナスなイ

¹⁸⁶ 同、第5話。

¹⁸⁷ 野島伸司、同、(https://www.fujitv.co.jp/fujitv/news/pub_2017/170919-s072.html)

¹⁸⁸ 「パパ活」第3話。

¹⁸⁹ 宮田文之、同、(<https://www.cinra.net/review/201706-papakatsu>)

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

メージが、パパ活にはある。しかし、それは真に人と関係し、繋がるという人間性への回帰、そして社会の中で生きるという希望、これらが欲された発露の一形態でありうるのではないだろうか。少なくとも、その入り口として機能することがありえる。市場経済下の人間が抱える金銭至上主義、効率性の追求、ムダなものは即切り捨てられる、同時に出来上がった希薄な人間関係——これらは現代社会が抱える問題であり、それゆえ人々の心に潜む闇である。人間の本性に、効率的なこと、はそぐわないのかもしれない。感情を持つために、最適な選択ではなく、一番いいと信じるような選択をする。しかし社会はそうではない。そうして、ギャップの中に、取り残されていく気持ちに何をするともできない。心に空虚な脱力感が入り込む。そして何かで埋めたいと思う。その何か、がこのドラマではパパ活であったのだ。

物語では、他者と「想像したような関係¹⁹⁰」になれない、二人が登場する。彼らは、身の回りの他者——親や恋人、妻、友達などと想像したような関係になれない。つまりは、他者に、真に気かけられたり、気かけたりすることができない。あるいはそれが難しい。心を満たし合うような関係になれない、なりたい、という葛藤を彼らは抱えている。孤独な彼らが居場所を見つけようと彷徨う。彼らが求めていることは、この関係を手に入れることなのだ。それは、「まるで世界で一番の理解者¹⁹¹」と出会うことでもある。そして、これらは、航や杏里が抱えている思いだけではない。現代に生きる人々が、抱えている思いでもある。

¹⁹⁰ 「パパ活」第2話。

¹⁹¹ 同。

5. 結論

これまで、ピグマリオン、インセスト（発達段階におけるタブー）、孤独という3つのテーマに分けて、『夜はやさし』と「パパ活」の二作品を中心に、「パパと娘」の関係性について論じてきた。『夜はやさし』では、精神科医のディックと、患者であったニコルが出会い、結婚をする。ニコルは、幼い時に実の父親とのインセストが発端となり、精神病を患っている。ディックへの恋は、彼女の父親への思いが、彼に乗り移った転移感情である。「パパ活」では、現代社会に生き、それぞれの孤独を抱えた45歳の航と20歳の杏里が、パパ活を通して出会う。そして疑似のパパと娘になる。航は杏里の通う大学の講師で、二人は先生と教え子でもある。パパと娘は、次第に男女の関係に発展していく。

『夜はやさし』ではミソジニーの風潮が顕著であるが、「パパ活」では見られない。ニコルは男性に従順だが、杏里は男性に意見することをためらわない。支配的な男性であるディックと異なり、航はそうではない。両作品にはおよそ100年の隔たりがあることから、時代が異なるためと思われる。しかし、ひっそりと航のピグマリオンの顔を明らかにする言動や行動もある。『夜はやさし』では、父という存在から脱却できない“父の娘”であるニコルが、強くなり、ディックから自立する。そしてそれは、彼女の父親から離れることができたことと同義で、彼女は、父親のインセストを克服する。孤独な者同士のディックとニコルは離婚し、ニコルは再婚する。一方でディックは消息を断つ。ディックは、それ以降人生を上昇させることはできず、物語は彼の死を仄めかし終わる。対して「パパ活」では、杏里は自らのピグマリオンであるパパという存在から脱却できなかった一方で、それぞれの孤独を抱えた航と杏里がお互いを思い合い、温かい人間関係を構築することに成功する。そして、共にフランスへ

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
と渡り、新たな人生の幕開けが訪れる。

両作品に一貫して見られるのは、娘であるニコル（ないしはローズマリー）や杏里は、父親——パパの愛情や存在感を求めているということだ。パパの方も、娘を恋人のように可愛がるという構図は、時代や国が違っても変わらない。そしてその関係には、インセストという不安もつきまとう。『夜はやさし』では実際に、ニコルの父親とニコルとの間にインセストが起こる。ディックも彼の娘であるトプシーに向ける視線は、近親相姦的衝動を秘めたものである。「パパ活」では、10年前に亡くなった娘を溺愛していた航が、娘の身代わりとして杏里を可愛がる。彼らはパパと娘になるが、しだいに性的関係を伴う恋愛へと発展する。「パパ活」でもインセストに等しい事態が起こるが、彼らに血の繋がりがなかったために歳差恋愛、という形に落ち着いた。

結論として、二作品が示すのは、パパと娘は多くの危険を孕んだ一方で、最もお互いを思い合える関係だということである。パパは娘の創造主——ピグマリオンである。パパは、自分の分身であり、異性でもある娘を、理想の女性として愛することになる。癒しの対象である若い娘に対して、インセスト願望を抱くこともある。パパに創られた娘も、創った者であるパパを愛するようになる。なぜなら、パパは彼女に大きな愛情を注いでくれるからだ。すなわち、彼らは、自己愛からお互いを深く愛するのである。そして、パパと娘のインセストは、二人が抱えた行き場のない、孤独ゆえに発生する可能性もある。しかし、そんな関係には終わりがやってくる。娘は、少女時代を過ぎ、大人の女性になる時がやってくる。娘が成長するためには、庇護者である自らの創造主——パパという存在から脱却しなければならない。そうして彼女は大人になり、自分の人生を生きるようになる。しかし、父親の影から脱却することは難しく、娘は大人になっても、パパ、という存在感を別の男性に求める傾向もある。そして、彼女が生きる現代社会において、他者や社会と繋がれない、繋がりたい、

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）
という孤独がある。そしてその孤独を解決する一つの手段が、野島伸司のドラマでは、パパと娘、であった。最終的に、『夜はやさし』と「パパ活」には、時代背景などからの違いもあったが、パパと娘の関係には普遍性が見られた。

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

参考資料一覧

F・スコット・フィッツジェラルド著作

1. 「カットグラスの鉢 *The Cut-glass Bowl*」(1920年)、『バビロンに帰る——ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック 2』村上春樹訳（中央公論社、1996年）、53-90頁
2. 「自立する娘 *On Your Own*」(1931年)、『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』村上春樹訳（中央公論新社、2007年）、203-250頁
3. 「バビロンに帰る *Babylon Revisited*」(1931年)、『バビロンに帰る——ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック 2』村上春樹訳（中央公論社、1996年）、135頁-176頁
4. 『夜はやさし *Tender Is the Night*』(1934年)、森慎一郎訳（作品社、2014年）

参考文献（日本語）

5. 足立富美『スコット・フィッツゼラルド研究』（北星堂書店、1975年）
6. アナイス・ニン『アナイス・ニンの日記——ヘンリー・ミラーとパリで』原真佐子訳（河出書房、1974年）
7. アナイス・ニン『人工の冬——アナイス・ニンコレクションⅢ』木村淳子訳（鳥影社、1994年）
8. アンドリュー・サミュエルズ編『父親——ユング心理学の視点から』小川捷之監訳（紀伊国屋書店、1987年）
9. 石川義之『親族による性的虐待——近親姦の実態と病理』（ミネルヴァ書房、2004年）
10. 伊豆大和『フィッツジェラルドの長編小説』（旺史社、1988年）
11. 上野千鶴子『女ぎらい——ニッポンのミソジニー』（紀伊国屋書店、2010年）

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

12. オウイディウス『変身物語』（下）中村善也訳（岩波文庫、1984年）
13. 倉橋由美子『聖少女』（新潮社、1965年）
14. 桜庭一樹『私の男』（文藝春秋、2007年）
15. 佐々木孝次・伊丹十三『快の打ち出の小槌——日本人の精神分析講義』（朝日出版社、1980年）
16. ジェーン・ギャロップ『娘の誘惑——フェミニズムと精神分析』渡部桃子訳（勁草書房、2000年）
17. ジョーン・アッシャー編『注目すべき 125 通の手紙——その時代に生きた人々の記憶』北川玲訳（創元社、2014年）、318-319 頁
18. 田中貴子『日本ファザコン文学史』（紀伊國屋書店、1998年）
19. デイヴィッド・セジウィック『ユングとサールズ』織田尚生・老松克博監訳（金剛出版、2009年）
20. デマリス・S・ウェーア『ユングとフェミニズム——解放の元型』村本詔司・中村このゆ訳（ミネルヴァ書房、2002年）
21. 永岡定夫『フィッツジェラルド研究余滴』（英宝社、2003年）
22. 橋爪紳也『ニッポンの塔——タワーの都市建築史』（河出書房新社、2012年）
23. 原田武『インセスト幻想——人類最後のタブー』（人文書院、2001年）
24. バーナード・ショー『ピグマリオン』小田島恒志訳（光文社、2013年）
25. 藤本純子「フィッツジェラルドの『父と子の問題』」、「帝京大学文学部紀要——英語英文学」（第30号、1999年）、77-85 頁
26. 森茉莉『甘い蜜の部屋』（新潮社、1975年）
27. 水本深喜「青年期後期の子の親との関係：—精神的自立と親密性からみた父子・父娘・母息子・母娘間差—」『教育心理学研究』（66巻2号、2018年）
28. 村上春樹『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』同氏訳（中央公論新社、2007年）

- 『夜はやさし』と「パパ活」に見る父と娘の関係性（亀谷早紀）
29. 矢川澄子『「父の娘」たち——森茉莉とアナイス・ニン』（平凡社、2006年）
30. ロジェ・グルニエ『フィッツジェラルドの午前三時』中条省平訳（白水社、1999年）

参考文献（英語）

31. BUTLER Sandra, *Conspiracy of Silence: the trauma of incest*, Volcano Press, 1978
32. ESTEVE Nuria & HUERTAS Rafael, «Zelda and Scott Fitzgerald and psychoanalysis: The construction of Tender Is the Night (1934)», *Culture & History Digital Journal*, CSIC, vol.7-1, 2018
33. HEARNE Laura Guthrie, «A Summer with F. Scott Fitzgerald», *Esquire*, December 1, 1964, pp.160-295
34. SEARLE Harold, «Oedipal love in the transference», *Collected Papers on Schizophrenia and Related Subjects*, Hogarth Press, 1968[1959], pp.284-303
35. SHAW George Bernard, *Pygmalion*, Dover Publications, 1994
36. TOLKIEN J.R.R., *The Fellowship of the Ring: being the first part of The Lord of the Rings*, George Allen & Unwin Ltd, 1966
37. WEXEIBLATT Robert, «F. Scott Fitzgerald and D.H. Lawrence: Bicycles and Incest», *American Literature*, vol.59-3, Duke University Press, 1987, pp.378-388

映像作品・映像資料

38. ジョージ・キューカー監督「マイ・フェア・レディ *My Fair Lady*」（ワーナー・ブラザース、1964年）
39. 野島伸司脚本「雨が降ると君は優しい」（HJ ホールディングス、2017年）
40. 同、「パパ活」（エイベックス通信放送&フジテレビジョン、2017年）
41. 同、「彼氏をローンで買いました」（エイベックス通信放送&フジテレビジョン）

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

ン、2018年）

42. 同、「高校教師」（TBS、1993年、2003年）

43. 「パパ活女子」、「ねほりんぱほりん」（NHK・Eテレ、2017年11月1日放送）

辞書

44. 金田一春彦編『パーソナルカタカナ語辞典』（学研、1999年、電子版）

45. 下中直人編『世界大百科事典』（平凡社、1988年）

46. 松村明編『大辞林』（三省堂、1988年）

ホームページ

47. ドラマ「パパ活」特設サイト：dTV 公式ホームページ(<https://pc.video.dmkt-sp.jp/ft/s0005201?cnt=sh000066>) 閲覧日：2018年12月31日最終確認

48. 野島伸司「現代の新たな男女関係を描くドラマ」
(https://www.fujitv.co.jp/fujitv/news/pub_2017/170919-s072.html) 2017年9月19日、閲覧日：2018年12月31日最終確認

49. 宮田文久「密やかな社会現象『パパ活』とは？野島伸司脚本ドラマをレビュー」
(<https://www.cinra.net/review/201706-papakatsu>) 飯嶋藍子編、2017年6月28日、閲覧日：2018年12月31日最終確認

『夜はやさし』と「パパ活」に見る父^{パパ}と娘の関係性（亀谷早紀）

あとがき

このプロジェクトを通じて、「物事に深くコミットメントすること」について考えさせられました。題材にした2作品は、どちらも私のお気に入りです。この1年間は、好きな作品、本当に取り上げたいテーマ、と正面から向き合うことができた年となりました。好きなことに打ち込むということ、それは「現在」を無我夢中にさせるものであり、「今まで」を振り返り、「これから」につながることであると実感しました。そして、何も思い入れがないことをするよりも、時にもっとずっと難しい、ということにも思いあたりました。この度の研究プロジェクトに参加させていただきことは、非常に得難い体験となりました。このような機会が与えられたことに、感謝いたします。また、中間発表などでは指導教員以外の先生方やTA・SA・履修者の皆様から、非常に貴重なご意見やご感想をいただきました。自分では気づかなかった着眼点も多くお寄せいただき、論文執筆の際に参考にさせていただきました。ありがとうございました。

そして、指導教員を引き受けてくださった経済学部教授の新島進先生には、論文執筆の際に多くのご指導をいただきました。一度など、夕方遅く突然のアポイントにも関わらず、温かくご対応してくださいました。先生、その節は大変申し訳ありませんでした。たくさんの鋭いご指摘をいただき、ようやく論文を完成させることができました。この場をお借りし、感謝の言葉を申し上げます。どうもありがとうございました。

↓論文印刷前に、下の行を選択して右クリック「フィールドの更新」すること↓

- 本文 35 字×25 行×64 ページ、全 45015 文字